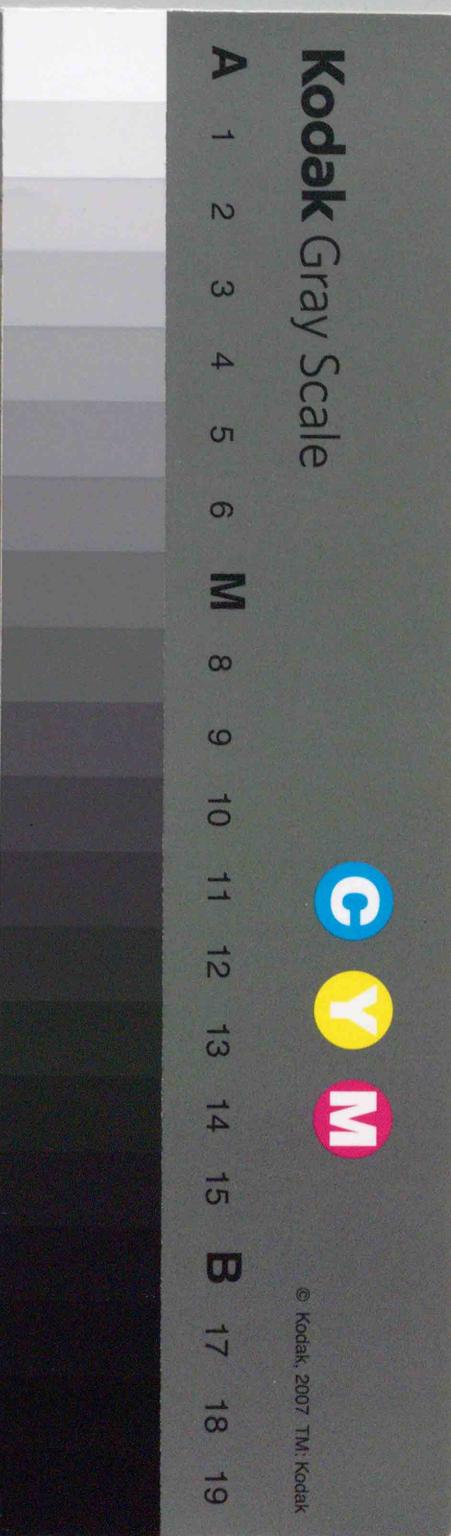
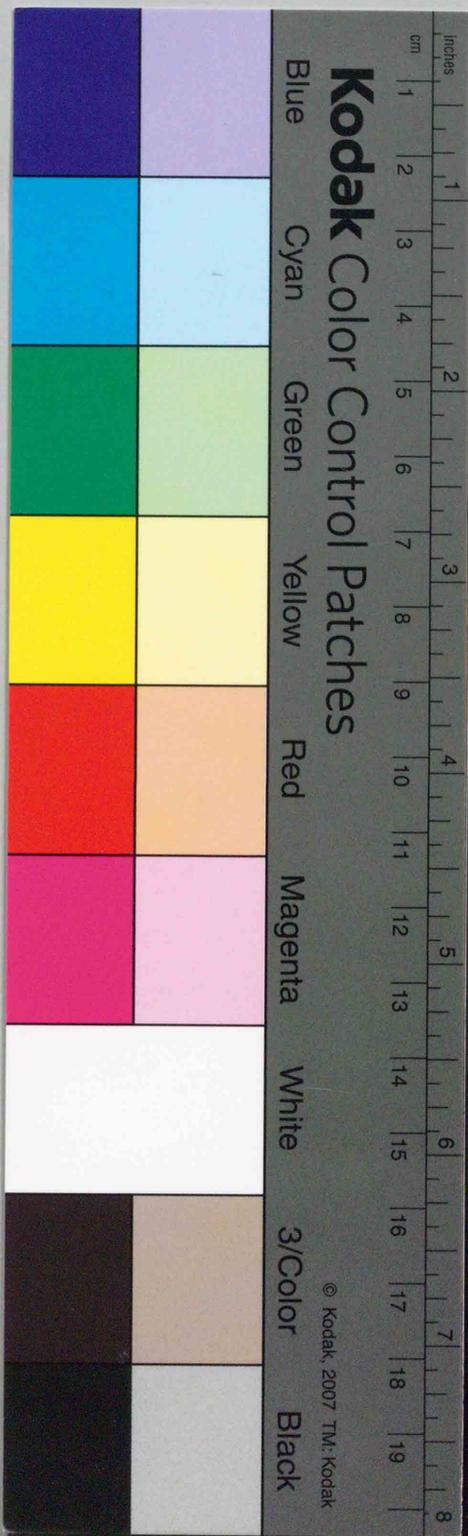
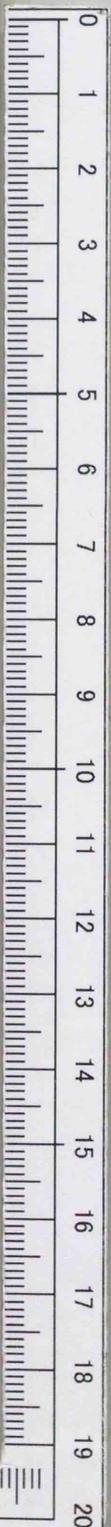


補訂  
新體國語教本

藤岡作太郎編纂  
藤井乙男補訂

七

375.9  
Fu10  
資料室



42070

教科書文庫

4
810
41-1912
200030
2359



© Kodak, 2007 TM: Kodak

名南  
かろほ

3759  
Fuio

文部省檢定  
大正元年十月九日 中學校國語科用

# 補訂新體國語教本

文學博士 藤岡作太郎 編纂  
文學博士 藤井乙男 補訂



東京 開成館藏版

## 卷七 目次

一	君が代と大和心	一
二	神社と氏族制	六
三	平安朝の夢	三
四	忠度都落	一六
五	朝の村	二〇
六	鎮西八郎	三
七	白河殿夜討	二五
八	兼平最期	三〇
九	武士道	三六

目次

M. KANEMATO

一〇	青砥左衛門	四三
一一	如意輪堂	四七
一二	四條畷懷古	五二
一三	洛陽と長安	五五
一四	鳴門	六〇
一五	名勝の保存	六六
一六	山中鹿之助の畫像に題す	七二
一七	狩野芳崖	七六
一八	ダーウヰンの勤勉	八二
一九	專一なれ	八七
二〇	物の上手	九二

二一	鼎かづき	九三
二二	小品四則	九六
二三	初對面	九八
二四	御わびの事ども	一〇〇
二五	良友	一〇一
二六	友千鳥	一〇六
二七	馬琴日記鈔序	一〇七
二八	藏書印	一一一
二九	上杉謙信	一一三
三〇	旅順追懷	一一七
三一	壕のうち	一二二

三三 ロンドン市政……………三三

三三 琉球人……………三五



補訂 新體國語教本 卷七

一 君が代と大和心

親と子と  
巖と堅く

大君上にいまして大御たからを慈しみたまひ、國民下に睦  
 びて、すめらみことを仰ぎ奉る。かしこけれど親と子との如  
 く、親しみて狎れず、敬うて恐れず、治めたまひ仕へまつりて、  
 常世に永く、巖と堅く、大内山の麓より、遠き島根の鄙までも、  
 君が代を八千代とことほぐ聲絶えず、一つ心に敷島の大和  
 心を磨くなるは、げに例なき國がらならずや。

君が代の歌は、もと古今和歌集に讀人知らずとして出でた

西洋人某の：  
……語るに

士官の……：  
……といふ

父の……：  
……問へるに

り。明治の御代となりて後、わが國に來れりける西洋人某の、かの國々には國歌といふものありて、國民の心を述べ、士氣をも勵ますなるに、この國には未だ定まれるものなきこそ残念なれと語れるに、ある士官の、わが故郷なる鹿兒島あたりの田舎には、祭禮の折などに君が代の歌を謠ふなり、これを試みたらばいかならんといふ。それこそとて曲譜をつけて、海軍に用ひたるが起りにて、この歌今はなくてかなはぬ國歌となりぬといふ。耳慣れてはあれど、その一節を聞く毎に、君を思ふ心の誠は春の潮の如く胸に漲るぞかし。昔大中臣能宣といふ歌よみありけり。ある時、その父の、近頃はいかなる作かあると問へるに、親王の御許にて、子の日を

(七)

題にて、

千歳まであぎれる松も、今日よりは

君にひかれて萬代やゑん。

と仕うまつりたるが、われながら詠み得たりと、思ひ侍りと答ふ。父怒りて、それ程の歌を人も處も辨へず、漫りに披露して、若し畏き御代を祝ふ折もあらば、更に上こそす意の詠まるべきかと、叱りぬとか。この言はあまりに頑なるやうに聞ゆれど、眞心を傾けて仕へまつるべき君は上御一人ばかりぞといふ意味を含めたりと思へば、これもまたあり難き教訓なるべし。されど榮えても枯るゝ時ある松の様よりも、唯長へなる巖の姿こそめでたけれ。

上御一人

和魂漢才

氣魄

敷島の大和心を  
人間はば、朝日  
にほふ山櫻花

大和魂はいふまでもなく、わが國民の生れし限の昔より存すれど、この語の起りしは後のことなるべし。平安朝の頃は和魂漢才と並べ用ひ、只管に唐代の文物にあこがれて、學問藝術はかの國に學ばざるべからずと思ひしが、さりとして魂はあくまでも神代のまゝに守るべしと信ぜしなりけり。されど和魂又はやまとだましひといふも、初は智慮分別といふ程の語なりしが、國民に磅礴したる精神はいつしかその意義を進めて、凜然として犯すべからざる一種の雄大なる氣魄を表さしむるに至れるなり。

磅礴

凜然

分析(折、拆、  
橋)  
花と咲きたり  
と覺ゆ

ず、わが國の教を興すべしと、説きたる大學者なり。その性、櫻を愛して屢吉野山に杖を曳きたれば、生涯の花の歌も甚だ多けれど、そのすべてを合せても、敷島の一首に如かず。その大和心を花に喩へたる意を尋ぬるに、朝日に匂ふ色の清きにや思ひ寄せけん、咲くも散るもいさぎよく、心残らぬ振をや悦びけん、若しくは英を集め枝を列ねて幾千本も重り合ひたるを、一致團結の姿にや比べけん。按ふに宣長の本意は、さる細かなる性質の分析もせず、たゞ一途に眺め入りたる花の心の、さながらわが魂に通ひ、わが魂のそのまゝ、花と咲きたりと覺えて、限なき感慨の直に歌に化したるならん。その世の人、後の世の人、この歌を誦すれば、また己が胸の内

のこの一首に盡きたるこゝちして、さてしも今かく喧傳するに至りしなるべし。うるはしき花よ、彌、うるはしかるべき大和魂よ。

## 二 神社と氏族制

我が内地を旅行すまば、民家ある處必ず森ありて、その入口には鳥居立ち、拜殿及び神殿の藁、老杉古松の中は隠見するを見るべし。これ概ね我が皇室の祖宗及び國家の功臣を祭り、兼ねてその式典を執行する所あり。そも、我が國家體系の單位は家族あり。即ち我が國家は家族の集合より成まり。家族制度を忘れては、決して我が風

藁

體系

俗、習慣、文物、制度を了解すること能はず、而してこの家族制度は又神社と大關係を有す。我が國民の家名を重んずること自己又は父母の名譽よりも遙く深き所以は、基づく所全くこゝに存す。

世襲の職

中臣

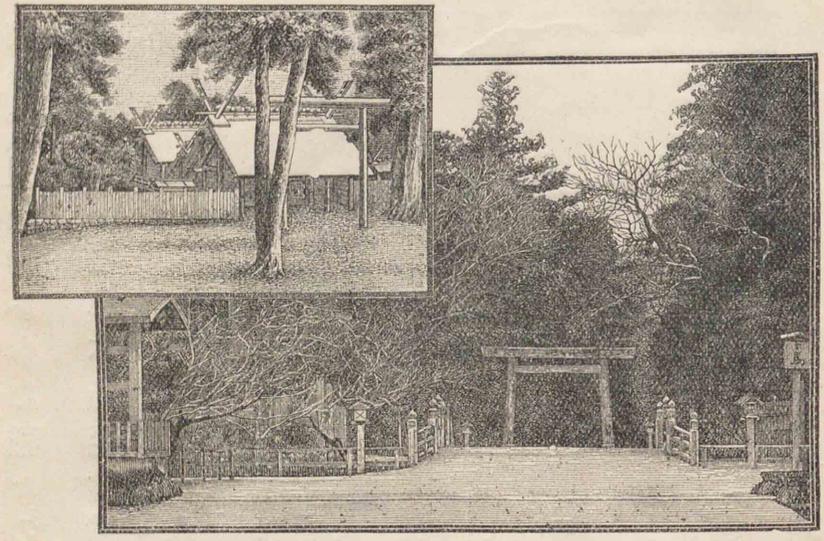
上古我が國の臣民は、皆その世襲の職を以て天皇に仕へまつりまはば、職名即ち官名なると共に、又氏名なりしなり。即ち官と職と氏とは常に同一の名稱より出でたり。中臣といふは祭禮を司どるものにて、神と天皇若しくは人との中より立ちて事を行ふといふ意義より出で、朝廷に對すまはば官名、一身よりいへば職名にして、人民相互に對しては氏名なり。同一族即ち同一氏中その宗族を大氏といひ、支族を小氏とい

超人格  
神格視す

ふ。大氏は天皇より直隸して數多の小氏を統率せり。この大氏小氏を合せざるもの即ち氏族として、之を日本建國の國家組織の單位とし、天皇は總べての氏族の大氏なり。既して之を以て國を建てざるは、氏の祖先より對する崇敬の念甚だ強く、終りは祖先より超人格の性質を加へて、之を神格視するに至り。而して之を崇拜するは、啻に過去の恩惠を感謝するのみならず、又氏族の福祉繁榮をも祈り、祖先の靈は常よりその子孫たる氏族を保護するものといふ信仰を有するに至りて、氏神は則ち起まり。氏族は各、その氏神を有して、之を崇敬祭禮せり。あゝきは總べての氏族の大氏たる皇室の祖先より對しては、天皇を始め奉り、一般臣民は甚深なる崇敬を表し、

原始的思想

神話

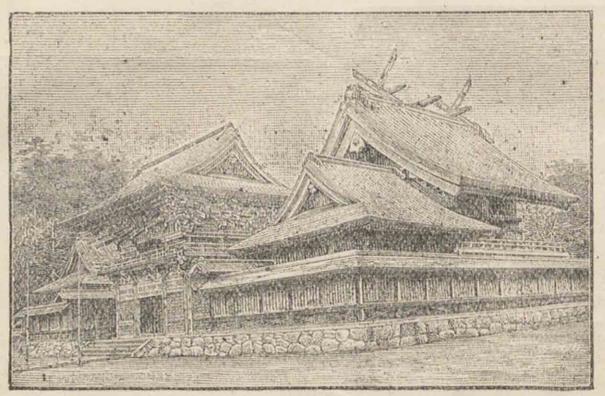


神苑より一鳥居を望む 皇太神宮

且之より信賴す。その神より對する感情は畏敬よりも寧ろ親愛を主とし、神と人との間よりは猶父子の親の如き情籠まり。然るに原始的思想は、この祖先崇拜より附加する、半人半神の性格を以てし、ここより我が國の神話を形成せり。既して神話となりしは、之より種々の思想附隨し

絶えず

來つて、祖先神からぬ種々の神格顯き、或は天然現象の神格化となり、山川草木乃至禽獸蟲魚まで各之は關係せる所謂

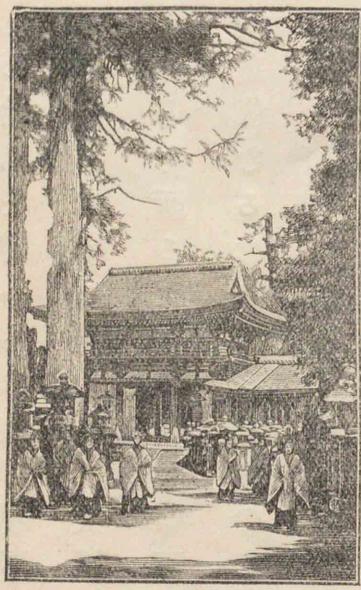


出雲大社

八百萬の神たちを生ずるに至るなり。嗚呼太古の神話より來る神や氏族の祖先のみならず、國家の功勞ある者は絶えず神として祀らる、益、その數を増せり。神社の建築物は上古の住家の最も上等なるものゝ模して作られり。而して國民崇敬の中心たる伊勢神宮の建築は、二十年毎に改

新嘗祭

めらるゝ規定よして、常に舊制よ則とるべきものとせらる。又出雲大社の如きは、紀元前よ同社の祭神たる大國主神のためよ造るる宮殿あり。然るに佛教渡來して寺院建築起り、神社よも影響して種々の變化を生ぜり。春日神社の彩楹朱欄を見ても知るべし。



春日神社

照大神高天原に在して、五穀の種子を得て大いに喜び給ひ、こゝに民生の食して活くべきものなりと宣ひて、之を繁殖せ

祈年祭

鎮魂祭

しめ給ふと傳へられ、毎年秋穀實のまるる時、まづ之を神に賽して後あらでは聞食さず。又風雨の災なく稔穀の豊穰ならんことを祈るための祈年祭、天皇の御壽長久を齋ひ及び御魂を鎮むるための鎮魂祭の如きは、神武天皇の時より起まりと傳ふ。かく祭事は國家の重事として、神祭は天皇大權の一は屬せり。政はまつり事にして、即ち祭政一致あり。歳時若しくは國家の大事は、天皇臣下を率ゐて祭り給ふは恆例あり。

(我國の教育による)

### 三 平安朝の夢

厭、(飽)

春雨淋しく降るまゝに、榮華物語を繙くやがてそれにも厭

翁の……  
手を引くに



きて、ふらくくと居睡るあと  
思ふに、肩を揺るものあり。ふ  
り返りて見れば、白髪翁の、  
吾は歴史の神なり、今汝が書  
の上にて見たる世界に導く  
べし、いざとて、手を引くにわ  
れにもあらで立ちて行く。程  
なく翁は小聲になりて、九百  
年前の都ぞ、見よ、こゝは左大  
臣の山莊、今日花見の行幸な  
りといふ。

寝殿  
上  
對  
殿上人

母屋  
庇

披講

渡殿

隨身

二月末つ方、花は眞盛なり。池の汀より築山かけて、一面に咲誇りたる中に、松の緑のまじりたるもうるはし。樹蔭に幕引き渡して、樂所を設けたり。翁私語きて、寢殿には上おはします。東の對には若殿上人、西の對には女房達侍りと教ふ。殿の中は見えず、廣く簀子を廻らして、御簾をさへ隔てたれば、母屋も庇も日影はさゝず、薄暗き住所の様なるべし。御簾を漏れて朗なる聲す。和歌の披講の長さことかな。實方の中將と和泉式部といづれか譽は得たまふべきと、渡殿の側に集ひたる隨身の一人がいへば、今一人が得る人は得たまへ、吾等の與ることかは、あな待遠や、明日も還幸はあるまじきかと、あくびまじりにつぶやく。

(七)

かづく

沓えまさる

直衣

指貫

披講の聲やめば、舞樂は始る。御簾もあがりたれど、辱さになほ殿の中は見ず。鳥の百轉もやむ頃、蘭陵王の舞あり、某の中將とかや。装束の錦は、夕日をうけて輝くに、落花は雪の如く舞人の上にふりかゝる。舞ひ終へて出でんとするを、主の大<sub>(七)</sub>臣召し返して、紅梅の衣かつけたまふ。左の肩にかけ、一曲舞ひて退きぬ。

夜も引續きて管絃の御遊あり、琴笛など、いづれもその道に名高き公達の奏するなりとぞ。夜の更くるまゝに、絲竹の音は沓えまさる。庭の篝火も消えて、東の山の端に廿日ばかりの月ほのく、と昇れり。いかなる君にかあらん、只一人直衣姿なよやかに、片手に指貫のそばとりて、朧月夜に如くもの

照りもせず曇り  
もはてぬ春の夜  
の朧月に如く  
ものぞなき  
大江千里

いづくよりか  
歸られたりけ  
ん。

ぞなきと、口ずさみつゝ池の邊を彷徨ふ。ふとその君の石に  
躓きて倒れんとせしに心驚きて、夢は覺めたり。春雨は霽れ  
たれど、春の日はなほ暮れず。

#### 四 忠度都落

薩摩守忠度は、いづくより歸られたりけん、侍五騎、童一人  
召し具して、五條の三位俊成卿此許におそして見給へむ、門  
戸を閉ぢて開かず。忠度と名のり給へば、落人歸り來れりと  
て、その内さきぎゆへり。薩摩守急ぎ馬より飛んで下り、自ら  
高らゐに申されけるは、これぞ三位殿に申すべき事ありて、  
忠度が參つて候ふ。たとひ門をばゆけられずとも、おのきは

七

苦しがること

ゆめく

剩へ

沙汰

さりぬべ

まで立ち寄り給へ。申すべきことの候ふと、申されたりけれ  
ば、俊成卿、その人ならば苦しがるまじ、あけて入れ申せとて、  
門をあけて對面ありけり。事の體何となうものあそれなり。  
薩摩守申されけるは、先年申し承つてより後は、ゆめく疎  
略を存せずとは申しなむら、おの二三箇年は、京都の騷、國々  
の亂出で來、剩へ當家此身の上に罷りなりて候へば、常小參  
り寄ること候はず。君已小帝都を出でさせ給ひぬ、一門の  
運命今日はや盡きはて候ふ。それに就き候ひてハ、撰集の御  
沙汰あるべき由承つて候ひし程に、かゝる世の亂出で來て、  
その沙汰なく候ふ條、只一身の歎と存じ候ふ。おの後、世靜ま  
つて撰集の御沙汰候へば、おれに候ふ卷物の中、お、さりぬべ

遠き御守とこそなり参らせ候はんずれ

卷物の……取つて持たれたりけるを

忘れがたみ

存すまじう

感涙抑へ難うこそ候へ

き歌候そバ、一首なりとも御恩を蒙つて、草の蔭ふても嬉しと存じ候そバ、遠き御守とこそなり参らせ候はんずれとて、日頃詠み置りれたる歌どもの中小秀歌とおぼしきを、百餘首書き集められたりける卷物の、今はとて打立たれける時、取つて持たれたりけるを、鑑比引合より取り出でて、俊成卿ふ奉らる。

三位大れを開いて見給ひて、かゝる忘れがたみどもを賜はり候ふ上は、ゆめく疎略を存すまじう候ふ。さても只今の御わたりこそ、情も深う、哀も殊にまぐれて、感涙抑へ難うこそ候へと宣へば、薩摩守、今は屍を山野に暴さは暴せ、うき名を西海の波に流さば流せ、うき世に思ひおくことなし、さら

西をさしてぞ歩ませ給ふ

前途程遠馳思雁  
山暮雲、後會期  
遙瀟瀟鴻雁曉露  
大江朝網  
口すさむ

勅勤  
故郷

歌一首ぞ……  
入れられける  
荒れにしを

ば暇申してとて、馬に打乗り、兜の緒を志めて、西をさしてぞ歩ませ給ふ。三位後を遙に見送つて立されたれば、忠度比聲とおぼしくて、前途程遠し、思を雁山比夕の雲ふ馳すと、高らゝに口ぞささ給へば、俊成卿も、いと哀に覺ねて、涙をおさへて入り給ひぬ。

その後世静まつて、千載集を撰ぜられけるに、忠度のありし有様、いひおきし言の葉、今更思ひ出でて哀なりければ、件の卷物の中に、さりぬへき歌いくらもありけれども、その身勅勤の人なれば、名字をバ顯されず、故郷花といふ題にてよまれたりける歌一首ぞ、よみ人志らずと入れられける。  
は、なこや志賀の都は荒れにしを、

むかしなぐらの山ざくらをか。  
その身朝敵となりぬる上は、子細に及むずといひながら、憾めしかりしとどもなり。  
(平家物語)

### 五 朝の村

朝の香高き岡に立ちて、  
昔れわれふあへるりな。  
青葉につゝむ柴の戸れ  
朝やけうつる里川れ  
鍛冶の鋸ふまじりつゝ  
麥つむ車入りはてし  
とよめく村の聲きけば、  
中よりひびく梭の聲、  
末にそめぐる水車、  
騎兵の蹄とゞろくも、  
森よりおこる銃の音。

鍛冶

賑そしきりな朝の聲、  
あゝ故郷もかくありし。  
豊りなるりな朝の村、  
(尾上八郎)

### 六 鎮西八郎

爲朝は八尺ばかりなる男の目角二つ切れたるが、紺地に色色の絲を以て獅子の丸を縫ひたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて白き唐綾を以て緘したる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたるを着るまゝに、三尺五寸の太刀に熊の皮の尻鞆入れ、五人張の弓、長さ七尺五寸にて銃打ちたるに、三十六差したる黒羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて、歩み出でたる體、樊噲も斯くやと覺えてゆゝしかりき。謀は張良にも劣

直垂

似す  
同じき

銃  
ゆゝし

樊噲と張良とは支那の漢の高祖の臣、吳起と孫武とは戰國時代の戰術家

らざれば、堅陣を破ること吳子、孫子が難しとする所を得、弓は養由にも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふ事なし。上皇を始め參らせてあらゆる人々、音に聞ゆる爲朝見んとて舉り給ふ。

左大臣藤原賴長

折角

左府すなはち合戰の趣計らひ申せと宣ひければ、畏つて、爲朝久しく鎮西に居住仕つて、九國の者ども從へ候ふについで、大小の合戰數を知らず、中にも折角の合戰二十餘箇度なり。或は敵に圍まれて強陣を破り、或は城を攻めて敵を亡すにも、皆利を得ること夜討に如く事侍らず。然れば只今高松殿に押寄せ、三方に火を懸け、一方にて支へ候はん、火を遁れん者は矢を免るべからず、矢を恐れん者は火を遁るべか

心にくし

らず、主上の御方心にくしも候はず。但兄にて候ふ義朝などこそ駈け出でんずらめ、それも眞中指して射通し候ひな。まして清盛などがへろへろ、矢何程の事か候ふべき、鎧の袖にて拂ひ、蹴散して捨てなん。行幸他所へ成らば、御免されを蒙つて、御供の者少々射んずる程ならば、定めて駕輿丁も御輿を捨てて逃げ去り候はんずらん。その時爲朝參り向ひ、行幸をこの御所へ成し奉り、君を御位に即け參らせんこと、掌を反す如くに候ふべし。主上を迎へ參らせん事、爲朝矢二つ三つ放さんずるばかりにて、未だ天の明けざらん前に勝負を決せん條、何の疑か候ふべきと憚る所もなく申しけり。左府聽き給ひて、爲朝が申す様、以ての外の荒儀なり、歳の若き

御免され。

天の明けざらん前に

以ての外の荒儀

富家殿は頼長の父忠實

和漢の先蹤似も似ぬ事

が致す所か。夜討などいふ事、汝等が同士軍、十騎、二十騎の私事なり、さすが主上、上皇の御國争に、源平數を盡して兩方にあつて勝負を決せんに、無下に然るべからず。その上、南都の衆徒を召さるゝ事あり、興福寺の信實、玄實等、吉野、十津河の指矢三町、遠矢八町といふ者どもを召し具して、千餘騎にて參るが、今夜は宇治に着き、富家殿の見參に入り、曉此へ參るべし。彼等を待ち調へて合戦をば致すべし。また明日、院司の公卿、殿上人を催さんに、參らざる者どもをば死罪に行ふべし。首を刎ぬる事兩三人に及ばば、のこりはなどか參らざるべきと、仰せられければ、爲朝上には承伏申して、御前を罷り立ちてつぶやきけるは、和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似

武士にこそ任せらるべきに

延びばこそ(延ぶればこそ)

ぬ事なれば、合戦の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御計らひ如何あらん。義朝は武略の奥義を究めたる者なれば、定めて今夜寄せんとぞ仕り候ふらん。明日までも延びばこそ、吉野法師も奈良大衆もいるべけれ、只今押寄せて風上に火を懸けたらんには、戦ふとも争でか利あらんや。敵勝つに乗る程ならば、誰か一人安穩なるべき、口惜しきことかなとぞ申したる。

(保元物語)

### 七 白河殿夜討

内裏

白河殿には、かくともしろしめさざりしかば、左大臣殿武者所の親久を召されて、内裏の様見て參れと仰せければ、親久

勇ません

除目

即ち馳せ歸り、官軍既に寄せ候ふと申しも果てぬに、先陣既に馳せ來る。その時、鎮西八郎申しけるは、爲朝が千度申しつるは、こゝ候ふくと忿りけれども、力及ばず。爲朝を勇ません爲にや、俄に除目行はれて、藏人たるべき由仰せけり。八郎、是は何といふ事ぞ、敵既に寄せ來るに、方々の手分をこそせられんずれ、只今の除目物騒なり。人々は何にもなり給へ、爲朝は今日の藏人と呼ばれても何かせん、唯もとの鎮西八郎にて候はんとぞ申しある。

堤を上りに

安藝守清盛は三條を河原へうち出で、筋違に東河原にうち渡り、堤を上りに北へ向つてぞ歩ませける。その勢の中より五十騎ばかり、先陣に進んで押寄せたり。こゝを固め給ふは

柏原天皇は桓武天皇

誰かは知らぬ

六孫王は源經基

知られ参らせたる身

誰人ぞ、名のらせ給へ、かく申すは、安藝守殿の郎等に、伊勢國の住人、古市伊藤武者景綱、同伊藤五、伊藤六とぞ名のりける。八郎これを聞き、汝が主の清盛をだに合はぬ敵と思ふなり。平家は柏原天皇の御末なれども、時代久しくなり下れり。源氏は、誰かは知らぬ、清和天皇より爲朝までは九代なり、六孫王より七代、八幡殿の孫、六條判官爲義が八男、鎮西八郎爲朝ぞ。景綱ならば引き退けとぞ宣ひける。

景綱、昔より源平兩家天下の武將として、違勅の輩を討つに兩家の郎等大將を射ること互に是あり。同じ郎等ながら公家にも知られ参らせたる身なり。下郎の射る矢立つか立たぬか、御覽ぜよと、能つ引いて射たれども、爲朝これを事とも

今生の面目  
後生の思出

矧ぐ

篋代

射向の袖

矢場

安藝守を始め

せず、合はぬ敵と思へども、汝が詞のやさしきに、矢一つ賜は  
ん、受けて見よ。且は今生の面目又は後生の思出にもせよと  
て、三年竹の節近なるを少し押磨いて、山鳥の尾を以て矧ぎ  
たるに、七寸五分の丸根の篋中過ぎて篋代のあるを打食は  
せ、暫く保つてひようと射る。眞先に進んだる伊藤六が胸板  
かけず射通し、餘る矢が伊藤五が射向の袖に裏かいてぞ立  
つたりける。六郎は矢場に落ちて死にさりけり。  
伊藤五この矢を折りかけて、大將軍の前に參つて、八郎御曹  
司の矢御覽候へ、凡夫の所爲とも覺え候はず、六郎既に死に  
候ひぬと申せば、安藝守を始めて、この矢を見る兵ども皆舌  
を振つてぞ恐れける。景綱申しけるは、彼の先祖八幡殿、後三

清原武則

拜み奉らばや

年の合戦の時、出羽國金澤の城にて、武則が申しけるは、君の  
御矢に中る者、鎧兜を射通されずといふ事なし、抑、君の御弓  
勢を慥に拜み奉らばやと望みければ、義家、革よき鎧三領重  
ね、木の枝に懸けて、六重を射通し給ひければ、鬼神の變化と  
ぞ恐れける。これより彌、兵ども歸服しけりぞ、申し傳へて聞  
くばかりなり。眼前にかゝる弓勢も侍るにや、あな怖しとぞ  
おちあへる。  
かく口々にいはれて、大將宣ひけるは、必ず清盛がこの門を  
承つて向ひたるにもあらず、何となく押寄せたるにてこそ  
あれ、何方へも寄せよかし、さらば東の門かとあれば、兵皆そ  
れもこの門近く候へば、もし同じ人や固めて候ふらん、唯北

さも言はれた

澤瀉絨

こはし

有るべうもなし

の門へ向はせ給へといへば、さも言はれたり、今は程なく夜も明けなんぞ、然れば小勢に駈け立てられんも見ぐるしかり、なんとて、引き退く所に、嫡子中務少輔重盛、生年十九歳、赤地の錦の直垂に、澤瀉絨の鎧に、白星の兜を着、二十四差したる中黒の矢負ひ、二所籐の弓持つて、黄河原毛なる馬に乗り、進み出でて、勅命を蒙りて罷り向ひたる者が、敵陣こはしとて引き返す様やあるべき、續けや、若者として、駈け出でられけるを、清盛これを見て、有るべうもなし、あれ制せよ、者ども、爲朝が弓勢は目に見えたる事ぞかし、過ちすなと宣ひければ、兵ども前に馳せ塞りければ、力なく、京極を上りに春日表の門へぞ寄せられける。

かたかは破りの野猪武者

をこの功名

矢目

爰に安藝守の郎等に伊賀國の住人山田小三郎伊行といふは又なき剛の者、かたかは破りの野猪武者なるが、大將軍の引き給ふを見て、さればとて矢一筋に恐れて、向ひたる陣を引くことやある、たとひ筑紫八郎殿の矢なりとも、伊行が鎧はよも通らじ、五代傳へて軍に遭ふこと十五箇度、我が手に取つても度々多くの矢どもを受けしかど、未だ裏をばかぬものを、人々見給へ、八郎殿の矢一つ受けて物語にせんとて、駈け出づれば、をこの功名はせぬに如かず、無益なりと、同僚ども制すれども、元よりいひつる言葉を返さぬ男にて、夜明けて後に、傍輩のいで矢目見んといはんには、何とかその時答ふべき、然れば日頃の功名も失せなん事の無念なれば、

おのれ  
猪頸に

よし／＼人は續かずとも、おのれ證人に立つべしとて、下人一人相具して、黒革緘の鎧に、同じ毛の五枚兜を猪頸に着、十八差したる染羽の矢負ひ、塗籠籐の弓持ち、鹿毛なる馬に黒鞍置いて乗つたりけり。

者その者には  
あらねども

門前に馬を駈け据ゑ、者その者にはあらねども、安藝守の郎等、伊賀國の住人山田小三郎伊行、生年二十八、公家にも知られ奉りし山田莊司行末が孫なり。山賊強盜を搦め取る事は數を知らず、合戦の場にも度々に及んで、功名仕つたる者ぞかし。承り及ぶ八郎御曹司を一目見奉らばやと申しければ、爲朝、一定きやつは引き設けてぞいふらん、一の矢をば射させんず、二の矢を番はん所を射落さんずと宣ひて、白蘆毛な

及んで  
仕つたる

射させんず

草摺  
縫ひぬきに

る馬に金覆輪の鞍置いて乗つたりけるが、駈け出でて、鎮西八郎此に在りと名のり給ふ所を、元より引き設けたる矢なれば、絃音高く切つて放つ。御曹司の弓手の草摺を縫ひざまにぞ射切つたる。一の矢を射損じて、二の矢を番ふ所を、爲朝能つ引いてひようと射る。山田小三郎が鞍の前輪より鎧の草摺を尻輪懸けて、矢先三寸餘ぞ射通したる。しばしは矢にかせがれて、たまる様にぞ見えし、即て弓手の方へ眞逆さまに落ちたり。鏃は鞍に留りて、馬は河原へ馳せ行けば、下人つと馳せ寄り、主を肩に引つ懸けて、御方の陣へぞ歸りける。寄手の兵これを見て彌、この門へ向ふ者こそなかりけれ。

(保元物語)

### 八 兼平最期

壽永二年（一八四三年）のことなり  
木曾は源義仲  
四宮河原は山城に、粟津は近江にあり  
今井兼平

何條

わるびれ見え給ふな

去年六月に木曾北陸道を上りしには、五萬餘騎と聞えしに、四宮河原を落ちけるには、只七騎には過ぎざりけり。粟津の軍の終には心は猛く思へども、運の極の悲しさは、主従二騎になりけり。木曾鎧踏ん張り、弓杖つきて、今井に對ひ、日頃は何とも思はぬ薄金がなどやらん重く覺ゆるなりといへば、兼平、何條さる事侍るべき、日頃金もまさらず、別に重き物をも附けず、御年三十七、御身盛りなり、御方に勢なければ臆し給ふにや。兼平一人をば、餘の者千騎萬騎とも思召し候ふべし。終に死すべきものゆるに、わるびれ見え給ふな。あの

よも過ぎ侍ら  
じ  
なるべかりつ  
死なんとなり

これをこそ一  
所にて死ぬと  
は申せ

打ち伏せられ  
て首をとらる

向ひの岡に見ゆる一むらの松の下に立寄り給ひて、心しづかに念佛申して、御自害候へ。その程は防矢仕りて、臆て御件申すべし。あの松の下へは、廻らば三町、すぐには一町にはよも過ぎ侍らじ、急ぎ給へと、泣くく、涙を押へ、口説きければ、木曾は名残を惜しむつゝ、都にて如何にもなるべかりつれども、こゝまで落ち來つるは、汝と一所にて死なんとなり。何處までも同じ枕に討死せんと思ふなりといへば、今井、いかにかくは宣ふぞ。君自害し給はば、兼平則ち討死なり。これをこそ一所にて死ぬとは申せ。兵の剛なると申すは、最後の死を申すなり。さすが大將軍の宣旨を蒙る程の人、雜人の中に打ち伏せられて首をとられん事、心憂かるべし。疾くく落

暇に任せて

元暦元年は一八四四年

甲斐ぞなき  
今井や續く

射させ

ち給ひて御自害あるべしと、勧めければ、木曾誠にと思ひ、向ひの岡の松を指して馳せ行きけり。今井は木曾を先立てて、引返し、命も惜しまず戦ひけり。木曾は今井を振り捨てて、暇に任せて歩ませ行く。頃は元暦元年正月廿日の事なれば、峰の白雪深くして、谷の氷も解けざりけり。向ひの岡へ筋違にと志す。つら、結べる田を横に打つ程に、深田に馬を馳せ入れて、打てども、行かざりけり。馬も弱り、主も疲れたりければ、とかくすれども、甲斐ぞなき。木曾は今井や續くと思ひつゝ、後ろを見返りたりけるを、相摸國の住人石田小太郎爲久が能つ引いて放つ矢に、内胄を射させて、眞額を馬の頭に當てて、うつぶしに伏

三六

首をぞ取りて  
ける  
今ぞ最後の命  
なる

入れよや

しにけり。爲久が郎等二人馬より飛んで下り、深田に入つて木曾を引き落とし、やがて首をぞ取りてける。今井これを見て、今ぞ最後の命なる、急ぎ御件に参らんとて、進み出でて申しけるは、日頃は音にも聞きけん、今は目にも見よ。信濃國の住人中三權頭兼遠が四男朝日將軍の御傳子今井四郎兼平なり。鎌倉殿までもしろしめしたる兼平ぞ、首取つて見参に入れよやとて、數百騎の中に駈け入つて散々に戦ひけれども、大力の剛の者なりければ、寄つて組む者はなし、但開いて遠矢にのみぞ射ける。されども甲よければ裏か、ず、あきまも射ねば手を負はず、兼平は箆に残る八筋の矢にて八騎射落しけり。太刀を抜いて申しけるは、日本一の

見習へや。

剛の者、主の御伴に自害する、見習へや、東八箇所の殿原とて、太刀の銚口にくはへ、馬より逆さまに落ち貫きてぞ死にける

(源平盛衰記)

### 九 武士道

上古の世、わが國民の間に特に發達せしは、尙武の氣風なりき。物部、大伴の二氏は弓矢を執りて皇室を護衛するを世職とし、子孫に武事を傳へ習はしめ、心膽を練り、氣節を磨かして、かりそめにも家名を墜すことなからしめんと教へたり。然るに文明の空氣は次第にこの習性を菲薄ならしめ、平安朝の末期、京師に於ては、武人さへも剛毅の風を失ひたり

三七

墨守  
下の諺は聖武天皇の詔の中に見えたり

き。

東國の人士は、古來素樸にして、文化の度の低きと共に尙久しくこの氣象を墨守したり。その諺に、額には矢は立つとも、背には矢は立てじといへるが如く、彼等は、將士も部卒も敵に背を見することを卑怯の振舞とし、家名を墜さんことを恐れ、恥を思ふこと最も甚だし。主の難に死せざるはその身の恥なり、人の難を見てこれを外にするもその身の恥なり。その身の恥は親の恥、家の恥、氏の恥となる。これを思ひては、家子郎黨に至るまで假にも武士といふ名のつくものは、いかにぞ死を鴻毛より輕んじ、名を泰山より重んぜざらん。武家執政の世となりては、將軍執權を始め、大名小名その一

鴻毛  
泰山

電光石火  
観ず

死を善道に守  
り名を義路に  
失はじとこそ  
勵むべけれ

三寸息絶ゆ

女々し  
辭世の句

族子弟を勵ますに皆この意を以てしければ、武人の特性愈發達して、こゝに所謂武士道がその體を具へたるを見る。特に禪宗等の佛教が新に興隆するに至りて、武人も多くその道に入り、人生を電光石火と觀じて、濁世に何の名残か惜しからんと思へり。たゞ形骸は朽つとも、恥辱は消ゆる時なし。されば身命こゝに滅ぶとも、弓矢取の本意は死を善道に守り、名を義路に失はじとこそ勵むべけれ。これ彼等が信念にして、若し餘生を偷んで、名を千歳の下に汚さん虞あらば、猶豫することなくして自殺す。かくして三寸息絶えんとする時も、女々しきことを忌み、悠々として辭世の句を誦するも少からざりき。

陶冶

忽諸

千鈞、千金

武士道は、鎌倉時代の陶冶を經、戰國に至りて益發揮し、徳川氏の世に至りて完成せられぬ。その要素とするところ、凡そ三つあり。  
第一に、武勇を尙び、兵馬の術を鍛鍊すること。これ武士の有すべき最も大切なる性能にして、戰國の餘風を承けて、文事は寧ろこれを忽諸にす。衣食の類は儉素を旨として、刀劍馬具を購ふには産を傾くるも惜しとせず。武術の操練甚だ盛んにして、諸藩には必ずその師範役を抱へ、民間にも道場を開く者多かりき。  
第二に、君に忠ふして、その一言を千鈞よりも重んじ、百年の命を塵埃よりも輕んず。主の爲には父子兄弟をも顧みず。二

追腹

千金、千鈞

天正元年は二二三三年

萬治元年は二三  
一八年、徳川家  
綱の時

君に仕ふるを一生の恥とし、甚だしきは君死して後その嗣君に仕ふることをだに爲さずして、追腹切る者もありき。第三に、清廉を旨として、財利を輕んずること。すべて武士は利慾に迷うて意志を枉ぐるを卑怯の極とし、前に千金を積むとも、これが爲に初一念を翻さざらんと期す。されば已むを得ざることありて金銀を借るとも、無形の名譽を質として、敢へて有形の物品を典ぜず。天正中武士の借用證文に、若し此金子相濟不申候はば、我等人にて有之間敷とあり。この氣風はおのづから町家に移りて、萬治中、商人にもまた、萬一の銀子返濟いたし不申事に候はば、人中にて御笑ひ被成候とも、其節一言の申分無之と、いへる者ありき。

(日本風俗史による)

一〇 青砥左衛門

知行  
大口  
絨箭  
絃袋  
過差  
飢ゑたる  
悲願

時宗、貞時二代の相州に仕へて、引付の人数に列りける青砥左衛門といふ者あり。數十箇所の所領を知行して、財寶豊なりけれども、衣裳には細布の直垂、布の大口、飯の菜には焼きたる鹽、干したる魚一つより外はせざりけり。出仕の時は木鞘卷の刀を差し、木太刀を持たせけるが、絨箭の後はこの太刀に弦袋をぞ附けたりける。斯様に我が身の爲にも、聊かも過差なる事をせずして、公方の事には千金萬玉をも惜しまず、又飢ゑたる乞食、疲れたる訴訟人などを見ては、分に隨ひ品に依つて米錢絹布の類を與へければ、佛菩薩の悲願に等

德宗領  
沙汰  
地下の公文

權門

所帶

裏(裏)

引く  
引出物

しき慈悲にてぞありける。

或時、德宗領に沙汰出來て、地下の公文と相摸守と訴陳に番ふ事あり。理非懸隔して、公文が申す所道理なりけれども、奉行頭人、評定衆皆德宗領に憚りて、公文を負にしけるを、青砥左衛門只一人權門にも恐れず、理の當る所を具さに申し立てて、遂に相摸守をぞ負かしける。公文不慮に得利して、所帶に安堵したりけるが、その恩を報ぜんと思ひけん、錢を三百貫俵に裏みて、うしろの山より潜に青砥左衛門が坪の内にぞ入れたりける。青砥左衛門これを見て大いに怒り、沙汰の理非を申しつるは、相摸殿を思ひ奉る故なり、全く地下の公文を引くに非ず。若し引出物を取るべくば、上の御惡名を

夙に  
補任

申し止めぬれば、相摸殿よりこそ悅をばし給ふべけれ。沙汰に勝つたる公文が引出物をすべき様なしとて、遂に一錢をも取らず、遙に遠き田舎まで持ち送らせて返しけり。斯様に私なき所神慮にや通じけん、或時、相摸守、鶴岡八幡宮に通夜し給ひける。曉夢に衣冠正しくしたる老翁一人、枕に立つて、政道を直くして、世を久しく保たんと思はば、心私なく理に暗からざる青砥左衛門を賞すべしと、慥に示さると覺えて、夢忽ちに覺めてけり。相摸守夙に歸り、近國の大莊八箇所自筆に補任を書きて、青砥左衛門にぞ賜ひたりける。青砥左衛門補任を披き見て、大いに驚きて、これは今何故に三萬貫に及ぶ大莊賜はり候ふやらんと問ひければ、夢想に依

宛て行ふ  
得こそ賜はり  
候ふまじけれ

超涯の賞

自餘

りてまづ姑く宛て行ふなりと答へ給ふ。青砥左衛門顔を振りて、さては一所をも得こそ賜はり候ふまじけれ、且は御意の通りも歎き入つて存じ候。物の定相なき譬にも、如夢幻泡影、如露亦如電とこそ、金剛經にも説かれて候へ。若し某が首を刎ねよといふ夢を御覽せられ候はば、咎なくとも夢の如く行はれ候はんずるか。報國の忠薄うして、超涯の賞を蒙らん事、これに過ぎたる國賊や候ふべきとて、輒ち補任をぞ返し參らせける。自餘の奉行ども斯様の事を聞きて、己を恥ぢし間、これほどの賢才はなかりしかども、聊かも理に背き、賄賂に耽ることをせず。これを以て北條八代まで、天下を保ちしものなり。

(太平記)

一一 如意輪堂

正平二年(一一〇  
〇七)の事

小袖

色代

阿部野の合戦は霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋よりせき落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、河より引き上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚に結びて、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱ぎ更へさせて身を温め、薬を與へて創を療せしむ。かくの如く四五日勞りて、馬に乗る者には馬を引き、物の具失へる人には物の具を着せて、色代してぞ送りける。されば敵ながらその情を感じる人は、今日より後心を通ぜんことを思ひ、その恩を報ぜんとする人は、聽て彼の手に

兩度は住吉、葛井寺の戦をいふ  
將軍は足利尊氏  
左兵衛督は義詮

催し勢

兄弟を兩大將にて

庭弱

宸襟

屬して、四條繩手の合戦に討死をぞしける。さて今年兩度の合戦に、京勢無下に打負けて、畿内多く敵に侵し奪はる。遠國亦蜂起しぬと告げければ、將軍左兵衛督の周章唯熱湯にて手を濯ふが如し。今は末々の源氏、國々の催し勢なんどを向けては、叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國、中國、東山、東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く淀、八幡に着きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行、舍弟正時、一族打連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成庭弱の身を以て大敵の威を碎き、先帝の宸襟を休め參らせ候ひし後、天下

討死仕り候ひ了んぬ  
死に残る

且は……且は

程なく亂れて、逆臣西國より攻め上り候ふ間、危きを見て命を致す所、豫て思ひ定め候ひけるかに依りて、遂に攝州湊川にて討死仕り候ひ了んぬ。その時、正行十一歳に罷り成り候ひしを、合戦の場には伴はで、河内へ歸し、死に残り候はんずる一族を扶持し、朝敵を亡し、君を御代に即け參らせよと申し置きて死にて候ふ。然るに正行、正時既に壯年に及び候ひぬ。この度我と手を碎き合戦仕り候はずば、且は父の申しし遺言に違ひ、且は武略のいひがひなき謗に落つべく覺え候ふ。されば今度師直、師泰に駈け合ひ、身命を盡し合戦仕りて、彼等が頭を正行が手に懸けて取り候ふか、正行、正時が首を彼等に取りられ候ふか、その二つの中に戦の雌雄を決すべき

龍顔

直衣

玉顔

叡慮

神妙

全うせん

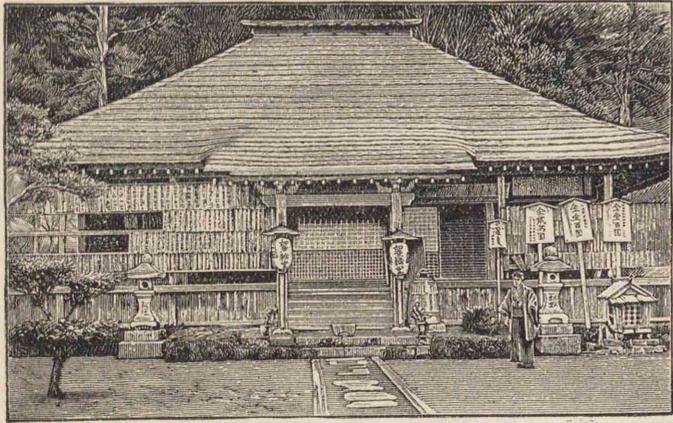
にて候へば、今生にて今一度龍顔を拜し奉らん爲に、參内仕りて候ふ、と申しもあへず、涙を鎧の袖に懸けて、義心その氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざる前に、まづ直衣の袖をぞ濡されける。

主上則ち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顔殊に麗しく諸卒を照臨あり。正行を近く召して、以前兩度の戦に勝つ事を得て、敵軍の氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功返すくも神妙なり。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戦天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずる事は、勇士の心とする所、進むべきを知りて進むは、時を失はざらんが爲なり、退くべきを見て退くは、後を全うせんが爲なり。

股肱

新發意

過去帳に書き連ぬ



り。朕汝を以て股肱とす、慎みて命を全うすべしと仰せ出さる。正行頭を地に着け、とかくの勅答に及ばず、唯これを最期の參内なりと思ひ定めて退出す。」

如意輪堂  
如  
以下、今度の軍に一足も引かず、一處にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參りて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各、名字を過去帳に書き連ねて、その奥に、

梓弓

かへらじとかねて思へば、梓弓

なき數にいろ名をぞとむる。

逆修

と、一首の歌を書き留め、逆修の爲と覺しくて、各鬢髪を剪りて佛殿に投げ入れ、その日吉野を打出でて敵陣へとぞ向ひける。

(太平記)

敵陣へと

一二 四條暇懷古

朝まだき

秋篠や 外山おろしの末氷る 正月五日の朝まだき、飯盛、尾崎の野よ山よ 満ち溢まゝる稻麻の兵、陽よは備へて鳥翼を張り、陰よは潜みて魚鱗をよみ、寄手おそしと待ちかけぬ。

分く

分る

嵐の花と

鎬を削る

つひゆ

春の日數もまど淺みどり、立ちもかくさぬ霞を分けて、先陣、後陣の二手よ分き、必死を極めし三千騎、潮を巻きて押寄する 白旗一揆をひとまくり、嵐の花と駈けちらし、雲霞の如き敵軍目懸けて、徑ちよ進む菊水の旗。旌旗東西よ入りまじり、汗馬南北よ馳せちがひ、追つつ返しつ、開きつ卷きつ、彼方を變じて蟠龍を結べば、此方は化して逸虎と分き、鎬を削る三十餘合。過去帳連署の三百餘騎、電光石火と薙ぎ立つる 獅子奮迅の太刀風よ、争ひかねし北あらし、一陣破き、二陣つひえ、三陣四陣皆頽き、大浪返して亂るゝ敵軍。目指す敵よ程近づきぬ。すは年來の本懷を 今ぞ遂げん

あはれ  
たゆたひ

とかけむかふ。あはれまこはそも何事ぞ、花とまぶひて散  
りかゝる。梢の雪のたゆたひに、望も絶ゆる道芝の露  
とくどけし玉の緒よ。

かゝる

春風ぬるき四條畷、昔を問へば秋しのや、外山の峯はか  
すめども、社の梅はかをまども。

(中村秋香)

一三 洛陽と長安

京漢鐵道は北京より漢口に至る支那の幹線鐵道なり、今日は鄭州より河南府までの支線も開けた。  
鄭州にして

今茲秋、漢唐興亡の跡を訪はんと欲して北京を出づ。京漢鐵道によりて南下すること凡そ二十時間、鄭州にして汽車を棄て、馬車を賃して西行す。道は黄河の南にあり、その流域に沿へりといへども、遠く河岸を離れたれば、混々たる濁水の

越ゆ

五嶽は泰山(東)、華山(西)、嵩山(中)、衡山(南)、恒山(北)

壓迫

漲るを見ずして、丘陵起伏せる只一帯の高原を走る。滎陽は漢の高祖の臣紀信がその主に代つて項羽に焚き殺されし處。これを過ぎ、虎牢の險を越ゆれば、鞏縣の南に嵩山を望む。嵩山は五嶽中の最も高さものにして、その高さ約八千尺。鄭州より三日、わが里數三十七八里にして河南府に入り。河南省河南府は即ち洛陽なり。周の武王は鎬京に即位せしが、別に都をこの地に營まんとして果さず。成王の時に至りて、周公遂に王城を築く。以爲らく、洛は天下の中なり、四方の民の入貢するに當りて里程相均しと。これより鎬京を西都といひ、洛陽を東都と稱し、王は西都に居て諸侯を東都に會せり。平王の時、犬戎の壓迫を避け、西都を棄てて洛陽に遷る、

星移り物變る  
絶ゆ  
蕭條  
禁ふ

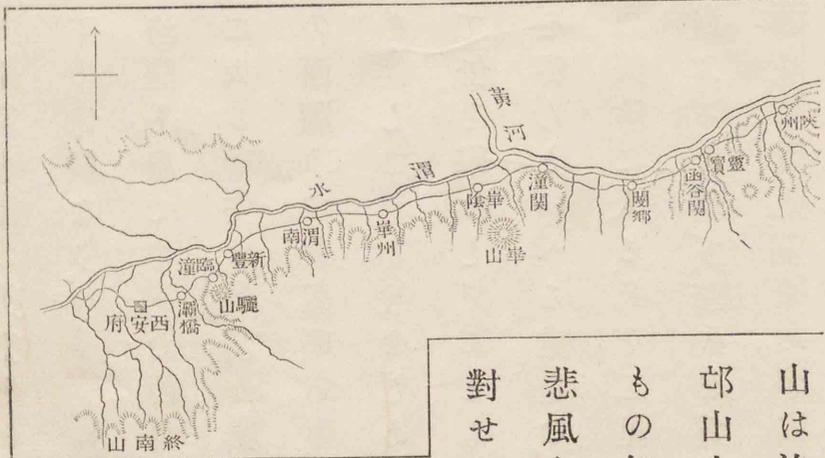


里 木 日  
0 5 10 15 20

即ち周室の東遷にして、これより東周の世なり。後東漢、西晉もこゝに都し、また南北朝における後魏の帝都たり。隋の煬帝別宮を營みて大いに土木を起し、唐の時また東都と稱せられたり。されど星移り物變り、奕世帝居の跡絶えて礎石をだに止めず、秋風蕭條、人をして空しく俯仰の感に禁へざらしむ。今の河南府も實はその故地にあらず、按ふに舊都はその東二三里の處にありしなるべしといふ。洛陽の地、北に邙山あり、南に伊、洛あり。邙

沈佺期は初唐の詩人  
北邙山上列墳  
塋、萬古千秋對  
洛城、城中日夕  
歌鐘起、山上惟  
聞松柏聲  
想ふ……  
……を

推古期



山は洛陽の墓地にして、沈佺期が詩に、北邙山上列墳塋、萬古千秋對洛城といへるもの即ち是。想ふ、當年山上累々たる青塚、悲風白楊に吹いて城中歌鐘の繁華と相對せしを。南の方、洛水を渡れば、更に伊水あり、伊水の岸を伊闕といふ、即ち龍門なり。斷岸絶壁、河を挟み、水は澄んで蓋の如し。兩岸に許多の洞穴を掘り、洞壁に佛像を彫る。北魏より唐に至るまで製作の年代歴歴として明かに、わが推古期より

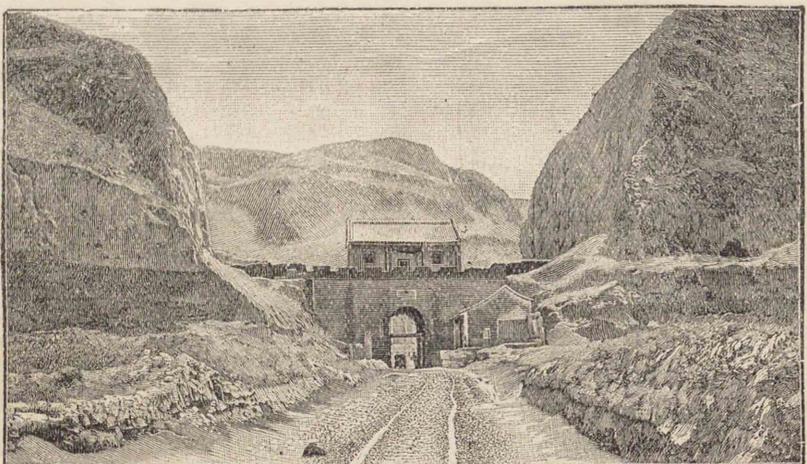
天平期  
美術との様式  
の關係

天平期までの美術との様式の關係一々指摘すべく、また天  
下の偉觀なり。  
洛陽を出でてまた西行すれば、新安より道は上つて高原地  
に入る。新安は項羽が秦の降卒二十餘萬人を坑殺せし處。そ  
の西澗池に會盟臺あり、昔秦王と趙王と會するや、秦王趙王  
を促して瑟を鼓せしめしに、趙の臣藺相如また秦王に迫り  
て缶を撃たしめんとし、五歩の内、臣頸血を以て大王に濺ぐ  
を得んといへる處、是なり。澗池の西、嶠嶺の險を越えて、函谷  
の天險に入る、凡そ二里の間、巉崖左右に聳え立つて、車軌を  
竝ぶるを得ず、騎列を爲すを得ず。老子が青牛に乗りて、關を  
出でんとし、關令の爲に道德五千言を遺して、去つて終る所

聳ぶ  
聳ぶ

踰ゆ  
潼關の……  
……あり

秦塞重關一百  
二、漢家離宮三  
十六 駱賓王



函 谷 關

を知らずといへるは、果してこ  
の關なりや、否や。孟嘗君が秦よ  
り逃れんとし、客をして雞鳴  
を爲さしめ、曉を待たずして出  
できといふ、その故關の跡、今何  
處にかある。函谷を踰ゆれば即  
ち關中にして、更にまた潼關の  
關中第二の險といふあり。洛を  
出でてこゝに至るまで、即ち秦  
塞百二と稱するもの。山又山す  
べて赭色の粘土質にして、峰に

絶えて……なく  
沿うて

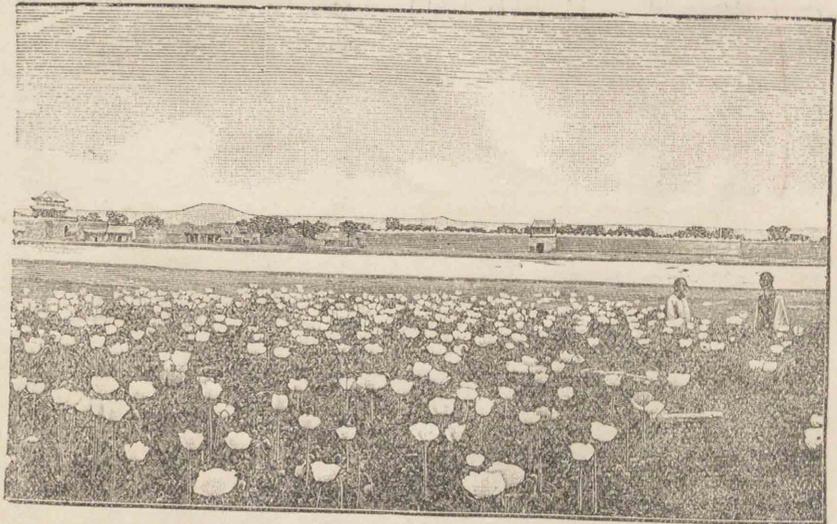
一株の緑なく、土に一點の青なく、道は谿間を歩むが如く、絶えて展望の景なく、晴には黄塵濛々として車を遮り、雨には泥濘深く輪を没す。かくの如き地に沿うて流るれば、黄河が千秋清むことなきも所以あるなり。  
潼關を出づれば一望開豁、久しく窖中にあつて後始めて天日に接したるが如く、快いふべからず。沃野千里、秋色蒼然として關中に滿つ。須臾にして左に崑山を望む。高さ僅に五千尺許といへども、山勢極めて崢嶸なり。新豊は即ち鴻門の故地、漢の高祖と項羽との會に、樊噲が盾を擁し、闔を排して入りりと稱せらるゝ處、即ち是。臨潼の城外に驪山あり、驪山の麓に華清宮あり、温泉、水尙滑かなれども、彫欄朽ちて草離々

楊柳云々は中唐の詩人楊巨源が賦得灞岸柳詩の句

霸を唱ふ

たり。行いて灞橋に至れば、長安早く眼前に在り。曩時、人の長安を出でて東行するものあれば、別を送つてこゝに依々の情を敍べたり。楊柳含烟灞岸春、年々攀折爲行人とは之をいへるなり。余今獨り衰柳の秋風に翻るを見る、また故園の情を起さざらんや。かくして長安に入れり。洛陽を出でしより日を歷ること十日、わが里數にして較百里に足らず、鄭州よりは凡そわが東京と京都との距離なるべし。  
長安は今の陝西省西安府にして、北に渭水あり、南に終南山あり。周の鎬京の遺址にして、咸陽、阿房二宮の跡、またその近郊にあり。秦は實にこゝに居り、關中の險に據りて、霸を天下に唱へしなり。所謂殺函東にあり、隴蜀西にあり、山を被り、河

未央、長樂は共に漢代の宮殿の名



阿房宮址より

を帯びて、四塞以て固となすものは是。漢の高祖既に秦を破り、天下を平定して洛陽に入るや、齊人婁敬、洛陽の地の天下の中に於て、徳あれば興り易く、徳なければ亡び易きを説き、勸むるに秦の故地に據らんことを以てせしかば、乃ち即日駕を旋し、長安に入りて、西漢の帝業を奠めたり。今尙荆藪の裡、未央、長樂の古瓦



咸陽を望む

を索め得べし。南北朝の時西魏またこゝに都し、尋で隋を経、唐に至りて、長安は帝都として壯麗を極め、華闕朱樓、巖として浮雲の外に立ち、三條九陌縦横に開け、千門萬戸參差として、藁を竝ぶ。わが奈良平安の舊都は之に倣うて、その規模を縮小せしものなり。今日の西安また河南以西の大都會たるを失はずとい

幾何か存する  
滄桑變じ易し

晩唐の詩人荆叔  
の題慈恩寺塔の  
詩

へども、まかも漢唐の盛觀よく幾何か存する。滄桑變じ易く、昔時金塔白玉の堂、只青松の在るを見るのみ、唐人が古を懷うて漢國山河在、秦陵草樹深、暮雲千里色、無處不傷心といひしもの、今また唐人に對して重ねて之を言はざるを得ず。

一四 鳴門

人馬の徂徠す  
る：觀るべし  
金輪際

鳴門の崎は海中に斗出すること十餘町、松あり、皆老いたり、岩あり、多くは奇峭、近く阿の大毛山と相對す、その間僅に半里のみ、長汀の白きところ、土佐泊、岸松のほとり、人馬の徂徠する、歴々として觀るべし。海中二大黒礁あつて横たはる、大なるもの長さ二町許、次なるもの一町許、根を金輪際に置き

走らす。  
怪潮の……卷  
き……吞  
下し去る壯觀  
過る

缺く

て、挺然として積水の上に拔く、岩には寸土なし、赤松根を露して偃蹇す。別に岩の小なるものまた數個あり、遊鼈の或は浮び或は没するが如し。綠礬の色をなせる潮流、その間に縈回し、走ること甚だ駛けれど、瀾の高きこと咫尺のみ。汀に觸るゝところ寸波相逐ひ、小石を走らせ、細貝を動かし、淨沙の上、層々の奇文を描くに過ぎず。怪潮の激して百千渦を卷き、峙てる礁、過る船、一切これを吞下し去る壯觀なく、湛然として碧落を涵す。余大いにこれを怪しむ。阿の山の缺けたるところは撫養の浦、簇々として粉壁を見る。岩礁の邊、舟を浮べて打魚する人多し。既にして落日西海に在り、夕雲の周邊に紫金の光彩を飾り、山や、水や、岩や、樹や、

燃ゆ  
覺ゆ

曩に白かりしもの

皆燃えんとす、誠に一幅の金泥畫を披展するが如し。打魚の舟乃ち散じて之くところを知らず、海氣の森然たるを覺ゆ、潮將に高からんと候。少之して日は波に入り、纖月眉の如く低く垂る。波の曩に白かりしもの碧となり、碧は更に紺となり、大毛の山より鳴門の崎に至る半里程間に一道を劃して、瀾色同じからず。食頃にして殷々として遙雷の如き響を聞く、響次第に大なり。忽ち見る、西南大洋の潮黒きところ、濤高きこと丈許、徐々として推移し來りて岩礁に激す。銀甲白馬の輕騎十萬吶喊して襲ふが如く、内海の海若波を揚げて、これを海峽窄きところに邀へ撃ち、滾々として相搏ち相鬪ひ、怒號して逐馳す。潮の

激するや、大小數十百の盤渦をなす、大なるものは徑一町に互り、小なるものも十數間を下らず、豁然として相吞吐し、忽ち分れ忽ち合ひ、頃刻にして百變す。奔流すること縱横數里、波は驚鷲となり、亂鳧となり、狼雨となり、狂雹となり、空濛霏微の中、讚阿の山依稀として無からんとす。壯絶快絶、萬髮のおのづから豎つを覺えざるなり。

看ること久しうして、則ち去つて福良浦の旅館に宿る。樓は海に近し、枕邊なほ吼雷の聲を聞く、中夜夢覺むれば、寂然として聲なし、東洋の龍王素車に駕りしか、内海の海若白旗を樹てしか。窓を推せば月なし、星漢一道大荒を度りて天地寥廓、時に水禽の靜かに啼くを聞く。煙波遙に隔つ須磨の古關

關守が幾夜の夢を破りしものこの聲か。

(運塚麗水)

### 一五 名勝の保存

昔紀伊侯徳川頼宣は、封内和歌浦開墾の進言を受けたる時、この浦の名は二十一代集の歌枕も上り、世に聞えたる靈區勝地なり。今眼前の小利の爲に永くこの山河に存する風致を失はば、後人我を何と云言はんとて、之を斥けりといふ。山河は人を造るとかや。誠一國の風光は、之に接する國民をして目悦び心樂しましめ、以てその趣味を高め、その性情を養ふのみならず、之を詩歌に詠み、之を文章に綴るに至りては、やがてその國特有の文學をなす。勝地の風教に關す

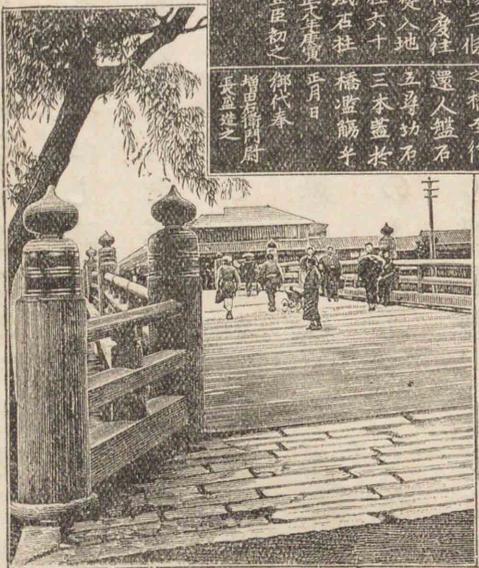
二十一代集は古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今の八代集と新勅撰、續後撰、續古今、續拾遺、新後撰、玉葉、續千載、續後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、新續古今の十三勅撰歌集となり

やがて

況んや……をや

る所亦大なりといふべし。況んや明媚なる山水にして史蹟を留むるもの少からざるをや。吉野の花を觀るものは、南朝皇居の址なるよりて、彌、その感を多からしめ、須磨の景を賞するものは、源平合戦の跡なるよりて益、その想を深

雄陽三條之橋至後  
代は倉住 還入盤石  
之礎入地 玉身功石  
之柱六十 三木蓋長  
日城石柱 橋邊筋井  
委金膏 正月日  
皇臣切之 御八本  
曾見橋門府  
長五邊之



京都三條大橋とその擬寶珠の銘

らしむ。人の勝地を愛護せしこと故あるかな。更直接史蹟を存する物の貴重すべきものあり。京都なる三條大橋を渡るものは、古き紫銅の擬寶珠のその欄干を飾

擬寶珠

天正十八年は二二五〇年

れるを見るべし。この擬寶珠は天正十八年豊臣秀吉のこの橋を改造せし時、諸大名より寄附しよるものよして、一々寄附者の姓名を彫り、増田長盛等のその土功を董しよる由をも銘せり。看る者誰か三百餘年前の當時を追想し、延いて豊公の偉圖を思ひ及ばざらんや。五條大橋も同じ時移し架せられよるものと傳ふまども、今の擬寶珠は正保二年改造の時のもあり。維新後一とび之を撤して近代風の平橋とあししよ、明治廿六年舊制を復して再びこの擬寶珠を襲用したるなりといふ。蓋し史蹟の亡びんを惜しみてなるべし。凡そ一國民がその歴史を原ねて、祖先の事業を追想することは、やめてその歴史を祖先より受けて、之を辱めず、更よ麗

銘す

正保二年は二三〇五年、將軍徳川家光の時

亡ぶ

況んや………ものなるをや

しき歴史を作りて、之を子孫に傳へんと奮勵する所以なり。この點より觀まば、瑣々よる古橋の一擬寶珠も至大の意義を有するものといふべし。況んや千年の古刹舊祠の建築美術は、我の祖先の精神的製作、物質的産物の我等に遺さきよるものなるをや。然るにこれら祖先の遺物に或は歲月と共に廢壞し、或は災禍に罹りて燼滅するは、惜しみても餘あることなるに、若し故意にその形を傷つけ、その跡を絶つよ如きことあらば、實に千秋の遺憾ならずや。勝地古跡の尊重すべく愛護すべきことかくの如し。されば政府も之が保護法を設け、民間も相當の維持法を講ずまども、各人亦之を愛重して、苟も毀損し變易して惜しまざるお

如きあきを要す。勝地を愛護するものは、邦土の秀麗を享樂する人よして、やぶて我の性情の涵養に努むる人なり。古跡を尊重するものは、國史の精華を發揚せしめんとする人よして、やぶて祖先の事業を辱めざらんと力むる人なり。

一六 山中鹿之助の畫像に題す

國破れて山河ありと詠じけん、山陰、山陽の間に雄視せし十國の太守、僅に三代數十年にして亡びたるに、遺憾やる方なきに、蟻螻にひとしき己が命の惜しさに、國を賣り、君を賣り、恬として恥ぢざる佞人ばら、城を枕に國に殉せんとする死士をよそにして、むざ／＼と月山の金城湯池を敵に明

國破山河在、城春草木深 杜甫  
尼子經久、晴久、義久の三代

國を枕に國に殉す

月山は出雲國にあり

戴くべしやは つくろふ

滿腔の孤憤 切齒扼腕

屠岸賈趙朔の族を滅さんとす、杵臼他の子を取りて共に殺さる、程嬰眞孤を

けわたし、主君を天涯の楚囚となし、罪なくてひとやの月を眺めしめたる、何等無限の痛恨ぞ。憎さも憎し、毛利の一族、君の仇なり、國の敵なり。出雲男子の玉の緒のあらん限は、俱に天を戴くべしやは、來れ、義を知る山陰の武夫よ、その折れたる太刀を磨け、その破れたる鎧を磨くろへ。國既に亡びたれども、なほ奉ずべき主家の一塊肉存せるにあらずや。七難八苦は平生神に祈る所、一死君の爲には何かあらん。滿腔の孤憤天地に横溢し、切齒扼腕、一呼して起てば、毛利氏爲に肝膽寒く、出雲の山河爲に震動しぬ。嗚呼壯なる哉。程嬰、杵臼合して一身にあり、六尺の孤、公にあらずして誰にか託せん。公の忠、公の勇、洵に百代に超絶し、殊

輔翼して立たしむ、趙武といふ

鳥合

小早川隆景  
吉川元春

豈公が戦の罪ならんや

つゆ

海月

に公が不屈不撓の精神は鬼神をして感泣せしむるに足れども、如何にせん、我は敗餘鳥合の殘卒、馬疲れ、糧乏しきに、敵は我に幾倍せる精銳新勝の軍、加ふるに小早川の智謀と吉川の武勇とを以てす。戦つて敗れ、敗れてまた戦ひ、刀折れ、矢盡きぬ。嗚呼大厦の將に倒れんとする、一木の支ふべきに非ず。尼子氏の再舉、竟に功を奏せざりしは天なり、豈公が戦の罪ならんや。

由來成敗を以て英雄を論ずべからず、涙あるものは公の孤忠に泣け。つゆ廉恥の何たるを解せず、武士道の何たるを解せず、一身一家の利害の爲に臣節を左右にし、强者の鼻息を視ひて去就を決し、叛服常なく、骨なく、腸なく、海月も音なら

犬豕中の麒麟

諸葛武侯は蜀漢の名臣諸葛亮

社稷

俠骨稜々

懦夫

欽慕する念いよく切に

ざりし當年山陰武士の間に、公の如き熱血硬骨の眞男子ありたるは、犬豕の中の麒麟にも譬へつべし。人生五十年、功名富貴は果して何物ぞ。成敗利鈍天に任せて、鞠躬盡力斃れて後已むの精神は、諸葛武侯既に之を實現せしが、今また山中公を見る。公や一身渾てこれ膽、心血を社稷に灑ぎ、俯仰して天地に恥ぢず、俠骨稜々として千載に高く、後世風を聞けば、頑夫も廉になり、懦夫も起つ。偉なりと謂はざるべけんや。われ嘗て古雲州の地に來り、公が手書を視、公が百戦の山河の間に低回し、平生公を欽慕する念いよく切に、感極つて覺えず涙下る。止んぬる哉、雲州の山誰が爲にか蒼々たる、飯梨川の水、空しく滔々として千古の恨を語る。嗚呼公一たび

去つて、雲州の地何ぞ寂寞たる。

(天町桂月)

### 一七 狩野芳崖

斯道

獅子王

維新の際、英邁の士多く防長の間に出で、政界はいふに及ばず、畫界にもまた森寛齋、狩野芳崖等の名家あり。特に芳崖は明治美術の基礎を立てたる斯道の恩人なり。狩野芳崖は代々畫を以て長州豊浦藩に仕ふる家に生れたり。年壯にして江戸に出で、狩野勝川に學ぶ。勝川は幕府の繪師にして、その繪所には多くの子弟を教ふ。されどその道久しく振はず、師弟いづれも古風を守りて清新の氣なし。芳崖その間に立ちて、橋本雅邦と共に同門の獅子王と稱せらる。

準繩に律せらる



狩野芳崖

その性準繩に律せらるべくもあらず、意の行くまゝに筆を擅にすれば、諸生は目して狂人とし、勝川もこれを憤れども、如何ともすること能はざりき。

いふばかりなし

幕末の世、國事多端に、文藝の士も安んじてその職に就くを得ずして、芳崖は郷里に歸りぬ。されど防長の地は紛擾最も甚だしく、士分のものはすべて銃を執りて起てば、芳崖も亦筆を抛ちて銃砲の鑄造に従事せり。明治の世となりて後は、家祿を奉還し、養蠶、製絲の業を始めたれども、幾ばくもなく失敗して、一家の窮乏いふばかりなかりき。

萬般

物質的文化

渾沌

維新の變は延いて萬般の事物に劇變を生じ社會の面目の一新せること、古來稀に見るとあるなり。されど國民すべて物質的文化の改善に忙しくして、文藝の如きは愛翫の暇なしとす。畫界も渾沌たる様にて、粗惡なる文人畫、幼稚なる西洋畫などの喜ばるゝのみ。有爲の畫家も或は官に雇はれて器械畫をかき、或は少しの賃を得て友禪染の下繪を作り、すべて生活に困難を極めたれば、斯道の光明はいつ輝くべしとも覺えざりき。

すら、さへ

明治十年、芳崖は意を決して東京に出でしが、貧窮は郷里にあるに異ならず。人の勸によりて五十幅の畫を作りしかど、表装の價だけ拂ふものすらなく、久しく大道の露店に曝し

さへ、すら

たる果は、田舎めぐりの道具屋に三圓にて賣渡したりといふ。ある時は砲兵工廠の圖案課に雇はれんとして、試験に落第し、ある時は陶磁器の下繪をかきて、少々の日給に飢を凌ぐ。その上に病をさへ得て、一家の苦辛譬ふるにもものあかりき。

不遇

幸に舊友雅邦が、島津家より犬追物の繪卷物の執筆を依頼せられて、その業を芳崖に譲れるあり。芳崖はこれによりて一時餬口の道を得たり。されどその妙技はなほ顯れず、明治十五年、第一回繪畫共進會の開かるゝや、一幅の畫を出ししが、何の評もなし。越えて二年、第二の會に亦二幅を出ししが、この時は最も低き賞狀を得たるのみ。不遇なること憐むべ

人文

しといへども、英傑は艱難に遭うて益奮ふ。芳崖謂へらく、美術は一國人文の純なるもの、これを盛んならしめずば、未だ國家の隆昌に誇る能はず、これを盛んならしめんはわが務なりと。かくて重大なる責任を一身ふ擔へり。

當時、國民は歐米の文化に酔ひて、古來傳習の事物を棄つるを憚らず、畫を評するもの多くは曰く、日本畫は彩具の種類少く、その法も拙ければ、到底油繪に敵すること能はずと。芳崖曰く、これ能はざるにあらず、爲さざるなり、疑ふものはわが畫を見よと。乃ち工夫を凝して、執金剛神の鬼を捉ふる圖を作れり。色彩を用ふること千變萬化、燈光錦帳に映じて金碧燦爛たり。見るもの愕然としてその妙技に驚き、畫道の革

到底油繪に敵  
すること能は  
ず



芳崖筆悲母觀音

(卷七、八〇—八二)

期して待つべし

目下の急務  
公爵伊藤博文

丹青

新期して待つべしとせり。

芳崖みづから繪事に勵むといへども、己の志を繼ぐものなからんには、死後の遺憾これに過ぎじ、學校を設けて子弟を養ふは目下の急務なりとして、その設立を計れり。適伊藤公その畫を見て奇なりとし、書を裁してこれを招く。芳崖喜んで曰く、機なりと。乃ち公の邸に至る、公偶用事ありて出でんとす。芳崖その袂を控へて曰く、政治には閣下あり、丹青には芳崖あり。繪事については閣下もわが言に耳を傾けざるべからずと、滔々として説くこと數時間に亙りぬ。かくて明治廿一年十月、政府は東京美術學校の設置を決し、芳崖をしてその繪畫部の主任たらしめぬ。

絶筆

惜しむべし、芳崖は種まき培ひて實を收めず、開校に先だちて病急に重く、廿一年十一月五日、六十一歳にして歿しぬ。絶筆は悲母觀音の圖にして、その草稿と共に美術學校に藏む、端嚴なる菩薩の尊容仰ぐべく拜すべし。苦心凡そ一年、永眠の前五日にしてその業を了へぬ。かくして絶世の名家は一生涯に苦しみたりといへども、明治の畫界はその指導によりて興れり。國運の振張を計るもの、その念にして成らば、一身の貧富何かあらん、芳崖また憾なかるべし。

一八 ダーウソンの勤勉

遂ぐ

およそ大發明を成し、大事業を遂ぐる人としいへば、唯その

非凡  
生物進化の原  
理

素質の非凡なることのみを思ひて、そこに大いなる努力の存するを忘るゝもの多し。チャールズ・ダーウソンの生物進化の原理を認めて、近世科學界の根本思想は一大變化を與へることは、世の知る所なり。氏のこの大發見は抑、何より得らましぞ。

頑固

氏の機智穎才は富めりといふべからざることは、その自ら談る所にして、他人の書など讀みても、初は唯之に感服するのみよて、その缺點は氣づくまでには良久しき思考の時間を要しと云ふ程なり。唯普通は看過せらるゝ、微細の事物に注意して、よく綿密に之を觀察する力は、常人は超えざるものあり。加ふるに一たび事に従ふや、頑固は之に執着し、

自然科学

満足なる結果に到達するにあらざるよりは、苟も之を中止し、又は抛棄するが如きことなありき。これ蓋し氏の自然科学の研究に適したる所以にして、天の特にこの人、賦與せるものといふべし。

さきど廣き自然界を觀察し、無数の動植物を研究することは、他の學問に比して長年月を要するは固より、かゝる學者に特に貴ぶべきは時間なり。さきば氏は力めて課業の配當に秩序あらしめ、寸隙の消費を愛惜して、以て間斷なき勤勞を續けしり。

氏は先づ日課の時間割を定め、日々正しく之を遵守して、日曜日といへども決して之に違ふことなかりき。早旦床を出

違ふ

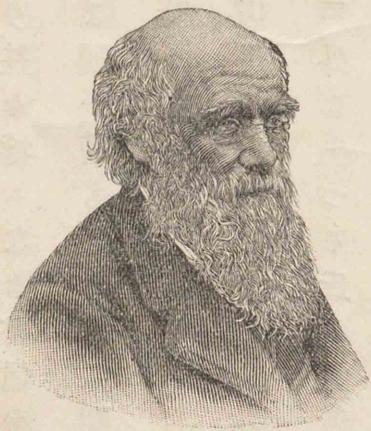
終る

訪る

終ふ

づるや、少時家の近傍を徜徉し、七時四十五分朝食の卓に就き、終りて直にその日の課業に従へり。總じて八時より九時半に至る間を以て最も勉學に適する時とせるなり。九時半

チャールズ・ダーウソンの肖像



に至るば、客室に入りて手紙或は小説類を讀ましめて之を聴き、十時半乃至十二時を過ぎて、再び研究に従事し、さて後少時散歩すること晴雨を論ぜず。散歩といへどもなほ温室を訪き、鳥の巢を窺ふなど、暫くも生物に對する注意を懈ることなし。

さて晝食を終ふまば、更ニ客室に入りて新聞を讀む。およそ

ものす  
埒もなし

科學は關せざる文字よして氏の躬ら讀みしものは、唯新聞のみなりき。次いでものするは手紙なり。一面識もなき人より、往々埒もなき書信を贈りこすことあまども、氏は一々之に酬い、苟も果さざる間は心安んぜざるものありきとぞ。三時よなきは寢室よ入り、ソープに横たはりて喫煙し、科學以外の書物を讀ましめて聽く。四時よ今數分と思ふ頃必ず戸外よ出づる氏の足音を聞くべし。これその散策を試むるよて、曾て一日も廢しよることなし。而して四時半より五時半までは、更よ研究よ從事し、六時再び寢室よ入り、煙草をくゆらして少憩す。一日中の喫煙前後よ、二回よ限きり。七時半軽く晚餐をしよ、め、夜は夫人と遊戯し、或は専門の書籍

試む

通宵

よ親しみて、十時半必ず寢よ就くこととせり。されど少し心を勞し思を煩はすことあるときは、通宵睫を交へざることすらありきといふ。  
時間配當の規律あること斯の如くなるが上に、尙且時間を浪費することを惜しめり。常よ曰く、事業を成就するは唯寸時の儉約よありと。さまばよとひ十分よもあま、十五分よもあま、その長短よ應じて之よ充つべき仕事を異よし、如何程短き時間といへども、之を活用して苟もすることなかりき。研究度を超え、過勞の症狀を見る時は、夫人は氏よ勸め、言を近親訪問よ託して、短期の旅行をなさしむることを常とせり。志あるよ氏はそれすら及ぶ限り時間を切りつめ、一度よ數多

多かり  
 反復  
 當面  
 一讀………  
 注意し  
 引用料

の用事を辨じて、六日のものは五日よて歸り來ること多あり。同一事物を反復するは、最も時間を浪費するものとしていさく之を嫌ひ、一實驗をするも之より知らるべき事柄はすべて之を調査することと勉め、直接當面の研究に役立つと否とを問はず、苟も攻究に資すべきものは注意して漏すことなし。實驗の神聖を感じ、細微のものといへども決して粗忽に取扱ふことなく、失敗に終りしものといへども、必ず相當の價値を有すべしとて、一々之を記録し置けり。讀書よつきても再三反復の勞なからんため、一讀重要の點に注意し、之をその卷末若しくは他の手控に記入し置き、異日の引用の料に供へきといふ。

一讀………  
 ……解す

心身過勞の爲  
 にやアラン

氏の著書はすべて實驗を基礎とし、當面の問題に關係ある事實は、その己の説に利あると否と論なく、一切之を列舉せり。この故に輕々して氏の書を繙くものは、一讀趣意の那邊にあるかを解するに困しむこと尠ならず。さきど氏は反對の意見に遭ふや、一々事實によりて之を論破し、公正謹嚴一絲紊まざるは、眞に學者的論述の範とすべし。氏は心身過勞の爲にや、甚だしく羸弱に陥り、半生四十年間一日として常人の健康を享有せしことなく、その病魔に抗する困難は傍人の想像に及ばざる程なりき。たゞその夫人の忠實なる看護と慰藉とによりて、纔にその事業を持続することを得たり。而も不朽の學説を創設し、數多の著述を

偉績

大成して、以て偉績を學界に遺しゝるは、氏が平素時間の配當に秩序ありしと、これに消費に節儉なりしとの積みて成りゝる結果ならずんばあらず。

一九 專一なれ

因果の理  
たつき  
おこせたらん  
桃尻  
落ちなん  
檀那

あるもの子を法師になして、因果の理をも志り、説經などして、世にゝるたつきともせよといひければ、教のまゝに説經師にならんゝめに、まづ馬に乗りならひけり。輿車もゝぬ身の導師に請ぜられん時、馬など迎にねこせたらんに、桃尻にて落ちなんは心うぐるべしと思ひけるなり。次に佛事ののち、酒など勸むる事あらんに、法師の無下に能なきは檀那す

すさまじ

年よりにけり

行末久しくあらまし事ども心にかく

老いぬ

さまじく思ふべしとて、早歌といふことを習ひけり。二つのわざやうく境に入りければ、いよくよくしたく覺ゆて嗜みける程に、説經ならふべきひまなくて年よりにけり。この法師のこにもあらず、世間の人なべてこの事あり。若き程は、諸事につけて身をたて、道をも成し、能をもつき、學問をもせんと、行末久しくあらまし事ども心よはかけながら、世をのどかと思ひてうち怠りつゝ、まづさしあたりたる目の前の事よのこまぎれて、月日を送れば、ことごとくなす事をくして、身は老いぬ。つひに物の上手にもならず、思ひくやうに身をももさず、悔ゆれどもとりかへざるゝ齡ならねば、走りて坂をくゞる輪の如くゝ衰へゆく。

むねとあらまほし

すてじ

なまじひに  
さし出でたら  
んこそいと心  
にくからめ  
いふめり

されば一生のうちよむねとあらまほしからん事の中よいづれあまざるとよく思ひくらべて第一のことを案じさどめその外は思ひすてて一事を勵むべし一日の中一時の中よもあまざの事の來らんなりよ少くも益のまさらん事を營みその外をばうちすてて大事を急ぐべきなり何方をもすてじと心よとりもちての一事も成るべからず

(徒然草)

### 二〇 物の上手

能をつあんと居る人よくせざらんほどはなまじひ小人に志られじうちよく習ひぬてさし出でらんこそいと心にくら免と常ふいふめれどかくいふ人一藝もならひ

七

かたほ

つれなく

なづむ

堪能のたしな  
まざる

きこえ

放埒

うる事なし。いまだ堅固かたほあるより上手の中にまづりて、誇り笑えるよもはぢずつれなくすぎてたしあむ人天性その骨なけれども道なづまずみどりよせずして年をおくれれば堪能たしあまざるよりつひ上手の位にいたり徳たけ人にあるされてならびあき名をうることなり。天下此物の上手といへどもはづめの不堪のきこえもあり、無下の瑕瑾もありきされどもその人道たおきて正しく、これを重くして放埒せざれば世の博士にて萬人の師となること、諸道かそるべからず。

(徒然草)

### 二一 鼎かづき

るふ

かづく

奏づ

とかくすれば  
たる

仁和寺の法師、童比法師にならんとする名残として、各、何そふ  
ことありけるに、るひて興、入るあまり、傍なる足鼎をとり



て、頭にかづきされば、つまるやう小  
するを、鼻をおしひらめて、かほをさ  
し入れて、舞ひ出でたるに、満座興に  
入ることかぎりなし。志ばし奏でて  
後、ぬかんとするに、大方ぬかれず。酒  
宴ことさめて、いあゝせんと惑ひ  
けり。  
とかくすれば、首のまそりかけて、血  
たり、唯はれにはれみちて、息もつま

醫師のがりゐ  
て行く  
道すがら

さこそ異やう  
なりけめ

をしへ

きくらん  
耳鼻こそきれ  
うすとも

りければ、打ちこらんとすれど、たやすくこれず、響きてたへ  
おさかりければ、かあハで、すべきやうあくて、三脚なる角の  
上に、かゝびらを打ちかけて、手を引き、杖をつゝせて、京なる  
醫師のがりゐて行きけり。道すがら人比、あやしみ見ること  
かぎりあし。

醫師のもとにさく入りて、對ひるゝりけん、ありさま、さこそ  
異やうなりけめ。物をいふも、くゝもり、聲小響きてきこねず。  
かゝる事は文にも見えず、傳へざるをくへもなしといへば、  
まゝ仁和寺に歸りて、親しき者、老いゝる母など、枕上より  
ゐて、なきかあしめども、きくらんとも覺ねず。  
かゝるほどに、あるもの比、いふやう、たとひ耳鼻こそきれう

からき命まう  
く

すとも命ばありのなどる生きざらん、たゞ力をたててひき  
給へとて、藁のしべをまそりふさし入れて、かねを隔てて、頸  
もちぎるばかりひきさるるに、耳鼻かけうげならぬけよけ  
り、からき命まうけて久しくやみるたりけり。  
(徒然草)

### 二二 小品四則

#### その一 里の小川

流るゝとしもなき里川、底は泥なれども、水は澄みたり。こな  
たは小徑行人なく、かなたは椿おのづから垣になりて、多く  
花をつけたり。流鶯時に一聲、思ひがけずも大輪の花ぼつり  
んと水に落ちて、水暫くは紋をなす。

おのづから

#### その二 朝の池

一泓の池水、半ばはこれ蓮花、白や、紅や、影を水に落して水に  
花あり。健鯉時に躍りて、波紋岸に及ぶ。水榭深くとざして、人  
籟なし。曉烟垂柳を罩めて、日未だ昇らず。

#### その三 夕の堤

白鷺の小首傾けて立てる洲邊、蘆花雪を吹く。夕陽傾きて柳  
影長き堤上、ゆきかふ人なし。巨蟹這ひ出でて、泡を吐きつゝ、  
螿を舉げて空を挟む。

#### その四 尾花

郊原一路、満目すべて薄なり。夕陽沈まんとして雲色悲しむ。  
馬の嘶まづ聞え、小歌聞えて、近づくを見れば、若き農夫馬背

嘶

水榭  
人籟

にあり。たづなは鞍にあづけて、馬おのづから歩む。鴉飛びつ  
くして四面寥廓たり。ふと顧みれば、招く尾花の末に一團の  
大月明かなり。

(大町桂月)

二三 初對面

近藤重藏

見る

大鹽平八郎、近藤重藏字重藏の名を聞き、一とび相見て胸中の奇を  
問はんと欲し、一夜その門を叩きて面會を請ふ。やめて出で  
來れる一人の老僕の、此方へとの案内ふつき、書院ふ打通り  
てまうけの席ふ着きぬ。さきど主人はいあゞしらん、待てど  
も待てどもその咳聲だに聞えず、燭淚堆を成して更漸く闌  
なり。平八郎豫てより重藏の傲慢人を蔑ふすることを聞き

書院

咳聲

七

さてこそ聞き  
しに優る曲者  
なれと

射る

件

知りしあは、別ふ心ふも懸けさりしかど、餘の待遠しさ小腹  
立さしく、さてこそ聞きしふ優る曲者なれと獨語しつゝ、ふ  
とあさりを見廻せば、床の間小百目砲あり、主人の愛藏と覺  
しく、製作頗る美しく、銃身爛として人を射、硝薬も亦備きり。  
平八郎大いふ喜び、傲慢者の荒膽挫ぎくれんと件の鐵砲取  
つて硝薬を装ひ、火蓋切つて放てば、轟然として百雷の墜下  
せる如く、屋壁震動し、硝烟室内小満ちさり。重藏靜あ小襖を  
開き、左手小烟草盆を提げ、右手小烟管を把り、悠々として座  
ふ着きて曰く、一發の御手竝感心仕ると、相見の禮畢りて、直  
に酒杯を呼ぶ。  
既ふして重藏故らふ一鍋を平八郎の座側に置きて、風味を

蠢々  
呵々

この手紙は明治  
卅一年十月十九  
日伏見桃山の禪  
僧天田鐵眼が京  
都三條啜なる小  
川亭の主人に贈  
れるもの

宵時雨

はずみ

請ふ。何心なく蓋を撤すまば、一個の鼈蠢々として鍋底に蠕動せり。平八郎少しも驚きたる色なく、呵々と打笑ひ、好下物遠慮なく頂戴仕らんと、小柄を抜きてその首を搔切り、血を啜りつゝ痛飲しなまば、流石の重藏もその氣膽小服しけん、こまより互ふ相往來して、交情極めて親密なりきとぞ。

(長田偶得)

### 二四 御わびの事ども

さても今月今日、尊宅ふ於て借用いさし候瓢、ひもつきあやし、精々注意致し、途中京極ふ立ちより、犬芝居一覽致し候までは無事小候處、四條大橋へさしかり候頃より宵時雨はらくとふり出し、道いそぎ候程に、いなるはずみふか

(巻七)

言語道斷

とやせんかく  
やせん

きさずもの

件の瓢するりと紐をぬけ、アハヤといふまふハシと取りおとし、こな微塵ふ打ちくどけ畢んぬ。そもく此の瓢は淺あらぬ御由緒の御品と承り候ふ、思はざる災難、言語道斷の事小候。御わびの事どもとやせんかくやせんと道すおら心痛のあまり、まづ左の條々にて思召ふしとひ申すべしと覺悟いさし候。

一、御珍藏のひさごふて候へば、早速名工ふ申しつけ、精々と繕はせ、御返し申すべきか。

一、きさずもの小相成り候てはいあゝふも候へば、洛中せんさくを遂げ、似寄の品買求め、御もどし申すべきか。

一、萬一似寄の品手に入らざるふ於ては、いさゝあ大形小候

不覺

へども、品柄よろしき物、心あさりも候へば、東京表よりとりよせ候うて御返し申すべきか。右條々いづきふても御不満と之あり候上は、もそや是非不及ばず。一時の不覺之ふ過ぎず候。依りて夫の世ふ於てまゝと御目ふかゝり申すまじく候。以上。

(今日の書面)

二五 良友

人は善友にあはん事を希ふべきなり。麻の中の蓬は矯めざるにおのづから直しといふ譬あり。蓬は枝ざし直からぬ草なり、されども麻に生ひまじりぬれば、由がみて行くべき道のなきまゝに、心ならずうるはしく生ひのぼるなり。心あし

生ふ

蓬生麻中不扶自直  
(荀子勸學篇)

十訓抄

支那隋代の人物  
之推の撰せるもの

き人もうるはしき人の中に交りぬれば、さすが彼此を憚るほどに、おのづから直くなるなり。顔氏が家訓には、  
與善人居、如入芝蘭之室、久而自芳也、與惡人居、如入鮑魚之肆、久而自穢也。

といへり。又或文には、人の心は水の入物に隨ふが如し、入物細ければ則ち細く、圓ければ則ち圓くなる、心は朋友にならふ、何ぞ選ばざるべけんやとかけり。又九條殿遺誡には、高聲惡狂の人に伴ふ事なかれと教へ給へり。かゝればはかなく語らはん友なりとも、よくその人を選ぶべし、薰蕕器を異にすべしとなり、ゆめく心あしからん人に伴ふべからず。花のもとに春ばかりを契り、月の前に一夜を限る友までも、

莫伴高聲惡狂之人  
(藤原師輔遺誡)  
はかなく

薰蕕不同器  
(世説)  
ゆめく……  
伴ふべからず

支那漢の商山の四皓、晋の竹林の七賢

王子猷は東晋の代の人、安通はその友戴逵の字

劉惔も東晋の代の人、玄度はその友許惔の字

物うく覺えぬべし

鄒陽、枚乘共に漢の梁の孝王の臣、兔園は孝王の園の名

情あるたぐひは忘れがたく思ひいでらるゝものなり。すべ  
て友をかたらふには、隔つる心なきを徳とす。芝澗に住みし  
四人の翁、竹林に籠りし七賢の類、さこそおもはしき友なり  
けめ。子猷は雪の夜月にあくがれて、遙に剡縣の安道を尋ね、  
劉惔は清風朗月に玄度のなき事を恨みける、まことに心に  
かなふ友のなからんには、いかなる興宴も物うく覺えぬべ  
し。さればこそ梁の孝王は鄒枚と聞えし二人の臣さりにし  
かば、兔園の遊をも停め給ふ。魯の仲尼は子路といひしおも  
はしき弟子におくれて後は、人の進めける志、びしほをも  
すて給ひにけり。孟母が子を思ふ故に居を三度までかへけ  
るも、友を選ぶ意なり。

伯牙も鍾子期も共に周代の人

元稹も樂天も共に中唐の詩人、樂天は白居易の字

伯牙、鍾子期といふは琴の友なり、鍾子期先だちて失せにけ  
れば、今は誰にか琴の音を聞き知られんとて、伯牙その絃を  
外して弾かざりけり。元稹と樂天とは詩の友にてありしが、  
元稹はかなくなりしかば、樂天その作りたりし詩どもを冊  
巻集めて、唐の大教院の經藏にぞ籠めおきける。

遺文三十軸、軸々金玉聲、龍門原上土、埋骨不埋名、  
とはこれをかきしなり。

後三條院東宮にておはしましける時、學士實政朝臣任國に  
赴けるに、名殘惜しませ給ひて、

忘れずば同じ空とも月を見よ、  
ほどは雲るにめぐりあふまで。

同じ空

古事談

君なれども、臣なれども、互に志深く、隔つる思なきは、朋友にひとしといへり。  
(十訓抄)

### 二六 友千鳥

たつ波も心へさてぬ友千鳥

まなくしばなく聲かそすなり。  
(源光圀)

◎ 思ふこといそでぞたゞにやこぬべき、

これにひとくき人しなれば。  
(在原業平)

棹させどそこひもしらぬわさけこの

ふりきあゝろを君みみるかな。  
(紀貫之)

思ふことこれにひとくき友もがな

人しなれば

君にみる

友もがな

すぐさまし

朝日に

月に

起居注

汗牛充棟

いひあそせつゝ世をすぐさまし。  
さしのぼる朝日に君をおもひ出でん、  
かさぶく月ふこれわするを。  
(藤原通俊)

### 二七 馬琴日記鈔序

我が邦は上は王公大人より、下は匹夫庶人小至るまで日記をしるす習、古より行はきて、その盛んなること起居注の本家なる支那も、ダイヤリーの喜ばるゝ西洋もその比を見ず。早くより傳寫せられ又印行せられて、世小現きもの汗牛充棟ともいふべく、近年小至り我が大學の史料編纂掛小蒐集せられゝるものも亦少しとせず。是等古人の

日記を見て予は夙く思へらく、日記をしるすには七つの徳ありと。蓋し一身一家の事、世上の事、日常思ひもし、感じもし、又見聞し、經歷せし所をしるすの故に、知らず識らず日記をつくる人の観察力を鋭敏し、周密することその一なり。初のほどは日記をつくる小懶く、或は單小陰晴を注して、その下を空白にすることなど多し。次第小慣るゝ小隨ひてまゝその間小自ら忍耐力の養はまゝるを感ぜしむることその二なり。日々の記事を了へる後、之小向へば或は忸怩らしめ、或は慊焉ゝる小堪へざらしめて、恰も明鏡小向ひゝらんが如く、吾の身を省るたよりとなること多し。此の倫理的効果その三なり。思ふこと言はざまば腹ふくるゝは人の

忸怩たり  
慊焉たり

日記こそ心の  
置かれぬ無二  
の友なれ

孰れか後の世  
の好材料たら  
ざるべき

常なり。さりとして喜怒哀樂うちつけ小他人小分つべき小あらずかゝる場合にこまを日記小しるすときは、日記こそ心の置られぬ無二の友なれと喜ばるゝこと多し。是はその四なり。老いゝる後の回顧の料となることその五なり。筆まめとなることその六なり。而して王公大人の記録はさらなり、匹夫の日記ありとも孰きあ後の世の歴史家の好材料ゝらざるべき。是はその七なりと。予は此の七徳を擧げて子弟を教へ、日記をしるす習慣を養はしむ。

近き頃我の東京帝國大學にて曲亭翁の日記を購ひ入きらるゝや、予は直小その一部分を讀みしむ、まこと小翁の傳小は唯一の材料ゝるべく、又幕末時代を研究する小は缺くべ

鈔録

多聞院日記略  
こそ最もよき  
一例なれ

全鼎

一櫛

あらざる史料の一なりと覺えたり。今や饗庭君之を鈔録して世小公小せんとして、予小一言を求めらる。日記を鈔録すること人のまゝすることなるを、多聞院日記略こそ最もよき一例なれ。是幕府の書物奉行下田師古が將軍の命を奉じ、南都興福寺なる多聞院の記録を鈔出せるものにて、よくその要を摘みとり、さきども尙全鼎を試みざれば飽あざるの憾なしとせず、饗庭君の此の鈔下田氏の鈔と優劣果して如何なりしかを知らず、さきど少くとも此の鈔小對し感謝すべきこと二つあり。一般の讀者をして僅の時間小日記の最も甜美なる一櫛を味はしめ、隨つて我も日記を記さんとの念を起さしむること、熱心なる人をして翁の日記の全本を繙

かんとの念を懐かしむること是なり。此の書は一册子なりといへども、古を考へ、後を益すること甚だ大なるべし。是やめて歴史の領分の擴張なり。これ予の喜んで此の書小序する所以なり。

(三上參次)

### 二八 藏書印

藤井高尙翁の藏書印小、寶とも寶と思ふ。ぬる文ぞ、わびなき世とて志み小まゝあるすな、まゝ伴信友の藏書印に、このふみを借りて見む人、借らむ小は、よみはててとくかへし給へやとあるをはじめ、人々の印小は種々のものあり。或は子孫永保、或は此書棄衣食所取、或は門外不許出一尺、或は珍書難得、好

しみにまかす  
見る  
かへし給へや

この人々よ  
執をとむ  
散りうす

書難購、子孫保之などあるもあり。この人々よ、いはばありその蔵書、小執をとめけむ、さる小子孫これを保つこと能はず、いつしる散りうせて、今はわが書庫、ふすら入るものあり。思へばあはまなりともいふべき。松崎謙堂翁はその蔵書印、小此書嘗在松崎氏之家としるし、り、子孫の保ちえぬを見ぬき、その識見、却りてさきの人々、ふまさり、りともいふべからむ。今や人情浮薄、父うせて三日もたぬ、その子は、その書を賣りて顧みず。そも學者の手、小落ちむ、不幸中の幸なまども、中ふはちり、り、散り失せて、珍書も好書も、その行方、さよわぬ、あるものいと多あり。ある人は、まこと書を愛せば、生前よ、その方法をめぐらせ、學

いふべからむ

顧みる  
そも

わく

者の子孫は大よ、愚なるものよといへり。や、極端なる説なまども、こまらの蔵書印を見れば、余もま、さう、ちうなづあるや。  
(落合直文)

### 二九 上杉謙信

戦國の世英傑の士多かりしが中に、用兵の精妙を以て聞えしを武田信玄、上杉謙信とす。信玄は正にして、謙信は奇、彼は動かざるべからざる所に動き、此は行かんと欲すれば則ち行く。一は大河の決するが如く、一は迅雷耳を覆ふに暇あらず。信玄は學んで法とすべく、謙信は仰ぐべくして、視ふべからず。この兩將同時に、出で、正々堂々の軍と神出鬼没の兵と

奇正

うちうなづか  
るや

天真爛漫  
武士道を個人  
に體現す

干戈相接して、龍虎の争を現じたる、眞に一代の偉觀なり。不識庵謙信は、信長、秀吉等の如く禍亂戡定の功なく、その爲すところ戦はんが爲に戦ふものの如し。行動の跡國家に益なきに似たりといへども、精神上の感化に至りては蓋し大いなるものあり。謙信資性勇猛敢爲、嚴格にしてまかも慈愛に、誠直にしてまた穎敏、純潔なり。闊達なり。痼癖強く、物に觸れて赫怒すれども、暴風吹き過ぐれば、一波動かず。一言にして盡せば、天真爛漫、所謂武士道を個人に體現したるは、不識庵その人なり。彼は武士の精華を後世に示さんが爲に生きざり。

(續七)

合戦の上に決  
せんところ存  
じ候へ



く如く見ゆ。物の具着することは少く、黒木綿の胴服を着、小き鐵の陣笠を被り、三尺ばかりの青竹を杖の如く提げ持ち、士卒を下知せりといふ。

武田信玄  
今川氏眞嘗て北條氏康と計り、領民に令して、武田氏の地内に鹽を輸出することを禁ず、甲、信、野の民大いに苦しめり。謙信これを聞き、書を信玄に贈りて曰く、近國諸將の舉動卑怯に候、某は唯幾度も勝負を合戦の上に決せんところ存じ候へ。鹽は如何ほどにても送り

參らせん、御申越あるべしと。信玄その高義に服せり。

謙信、信玄と和を議せし時、武田氏の使に問うて曰く、甲斐の士に向井與左衛門といふ者ありや。曰く、あり。問ふ、創の痕あるか。答ふ、面に太刀疵あり。謙信曰く、さては長らへたるよな。

長らへたるよな。

よも助らじと思ひしを。

天正二年は二二  
三四年

川中島の戦に、名のりかけて後ろより吾を突く所を、振返りて一刀斬りたりしぞかし、よも助らじと思ひしをとて、萌黄の胴肩衣の、槍の疵あるを取り出し、書簡を添へて向井に贈りぬ。世にこれを返り感状といへり。  
謙信また詩歌をよくせり。天正二年、能登七尾の城を攻め落し、折節九月十三夜に當ればとて、詩歌の會を陣中に開きぬ。賦して曰く、

霜滿軍營秋氣清、數行過雁月三更、

越山并得能州景、遮莫家鄉憶遠征。

また越中魚津の城にて詠じたる歌、

武士の鎧の袖をかたしきて、

まくらにちかき初雁のこゑ。

### 三〇 旅順追懷

荒涼たる劫餘の景、草白く、石露はなり。到る處の殘壘奮戰の名殘を留め、所在の廢墟苦鬪の痕を貽す。白骨狼藉、空しく雨に暴さる、知らず、忠魂那邊にかさまよふらん。折戟散亂、徒らに地に埋る、想ふ、何者の勇士の形見ぞ。心なくわが踏む土の

狼藉

かたしく

茲にや……  
結びがての夢  
の故郷を遶り  
たる

死をや待ちた  
る

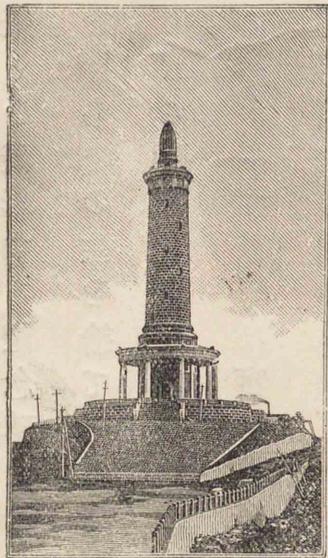
悲憤と敵愾と  
の呪語

一歩々々、御國の爲にと濺ぎたる我が同胞の血潮の河と流  
れし跡よ。見渡す限の山も丘も、大君の爲にと捧げし我が同  
胞の折り重れる屍にや蔽はれたりけん。彼方の谿間、茲にや  
露營の霜寒く、明日知れぬ身を横たへて、結びがての夢の故  
郷を遶りたる。此方の丘上、茲にや痛傷の兵士が無念の聲も  
たえふに、刻一刻と迫り来る死をや待ちたる。四顧人なく、  
悲風只漸たり。眼を閉ちて佇立すれば、喊聲を砲聲と和し、劍  
光を硝煙に閃かして、創を裹み血を啜り、僵る、死屍を踏み  
越えて、躍進突貫する我が兵の當時の状、恍として睹るが如  
きを覺ゆ。

嗚呼旅順、此の二字は曾てこれ我が國民が悲憤と敵愾との

奮に……のみ  
に非ず

呪語たりき。今や此の一地名は我が國民の名譽と光榮との  
標號たらんとするなり。蓋し旅順の捷は、奮に敵の生理的體  
力と闘ひて克ちたるのみに非ず、その心理的精力と闘ひて



旅順表忠塔

亦之に克ちたるなり。獨り  
風雨寒暑の自然力と闘ひ  
て克ちたるのみに非ず、敵  
の銃砲、塹壕、坑道、鐵條網、あ  
らゆる機械力と闘ひて亦  
之に克ちたるなり。即ち我が國民の武力、智力、精力の傾倒に  
して、而して又その勇氣、膽氣、義氣の發揚なり。その裂け飛べ  
る一片の石にも、盡く我が國民の忠勇と義烈とを刻み、その

我が國民は：  
：：：奮闘者  
忠死者の功に  
對して感謝と  
崇敬との念を  
忘るべからず

崩れたる一寸の土にも、悉く我が帝國の優秀と偉大とを銘せり。嗚呼旅順の山、旅順の水、その山の有らん限、その水の盡きざらん限、この地は長へに我が國家、我が國民の名譽と光榮とを表彰する記念碑たるべし。而して我が國民は、その身を擲ち、その生を捨て、その肉と血とを以てこの記念碑を彩りたる奮闘者、忠死者の功に對して、感謝と崇敬との念を忘るべからず。彼等は實に國光の發揮者たり、はた世界平和の擁護者たるなり。  
俯仰低回、無限の感慨を懷いて、獨り落暉に立てば、孤影長く地上に曳いて、衣袂風に冷かなる。

三一 壕のうち

聲すなり  
(聲するなり)

誰か來たる  
たもとほる  
門邊にこそは  
來ぬるなれ  
問ひけらく

空かき曇り、晝のまの  
南のまどをうつ雨と

さむさなごめる夕闇に、  
共におとなふ聲すなり。

誰か來たると見さすれば、  
道に迷ひてたもとほり、

かひな射られし兵卒の  
門邊にこそは來ぬるなれ。

創を裹みてこが床に  
第一線の壕内の

並び臥さしめ、問ひけらく、  
まことのさまを語らずや。

ひづち  
道をなみ  
日をや經し

なめし  
思さめど  
胸ぞいたむな  
る

今ゆのち

帽にあしたの霜ふりて、  
糧をはこばん道をなみ、  
ゆふべの雨に袖ひづち、  
糲かみて日をや經し。

いかにといへば、兵卒は  
頭たゆげにうちふりて、  
辭まばなめしと思さめど、  
思へば胸ぞいたむなる。

かしこのさまは、歸らん日、  
われは語らじ、今ゆのち、  
妻に、子どもに、母、父に、  
心一つに秘めおきて。

(森鷗外)

### 三二 ロンドン市政

英國における地方政治の運用は實にその國民の着實忠誠

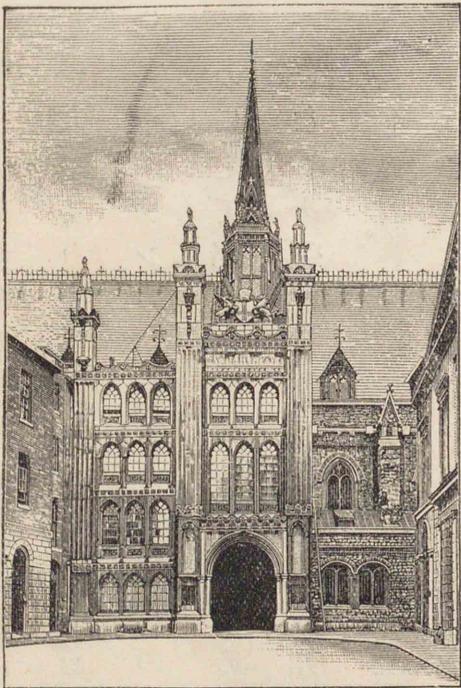
七

神髓

熱鬧

なる努力に依れり。而して常に名望ある長者を選んで、之に  
信賴する念尤も厚きは、これその地方政治の神髓にして、又  
宇内に卓絶せる特色たり。

英國の地方制度は、全く歴史と習慣とに由りて成りたる一



倫敦市廳

種特有の組織にし  
て、就中、保守自重の  
氣象に富めるは倫  
敦市なり。倫敦市廳  
は、市の中心、車馬熱  
鬧の中に在り。門の  
上には、神は吾人を

貢獻

支配すとの羅句語を鑄めり。その門を入ること數十歩にして一大室あり、まづ眼に映ずるものは、賢相ピトの肖像及び名將ネルソンの記念碑なり。皆市の公費を以て建造したるものにして、邦家多難の際、これ等の偉人が貢獻せし功勞の大いなるを頌せり。市長の選舉の如き、この室に於て行ふことを例とす。

推薦

市會には古式の砂時計を置き、十分毎に一鳴することとなし、之を以て議員各自の發言時間とせり。市長は市の參事會員の古參者より推薦せられ、國務大臣に等しき名譽ある地位を占め、その在職中は特に榮爵を賜はり、貴族の尊稱を得。皇帝の即位に當りては、市長がその侍從長として金盃を受

（七）

くる式あり。市長に附屬してまた捧劍職と稱する吏員あり、市長の爲にその劍を持して公式に隨從す。この劍は即ち市長の裁判權を代表する具なり。市長の年俸は十萬圓、就職後、國務大臣以下貴賓三千餘人を招きて宴を張る例あり。總じて市長、參事會員、邑長の適任者は數、任期を重ねる風あり。且彼等の多くは、市長、邑長の職を退きても、尙參事會員又は議員として、依然公共の事に従ひ、後進の人を助けて盡力怠らず。實に他に見るべからざる美風なり。

（井上友二）

### 三三 琉球人

薩南諸島の西南、之と臺灣との間、沖繩島を始め大小五十

酷似

餘の島嶼あり、所謂琉球なり。此の島嶼は、海洋の中不僻在し、住民久しく日本本土と隔絶して、一種の發達を遂ぐさまで、其の容貌氣質の本土人に酷似せるのみならず、少し其の言語、習俗を討究する時は、決して其の日本人と祖先を異ふする種族ふあらざるを知るべし。

音韻の變化  
語尾の屈折

語彙

琉球語は音韻の變化、語尾の屈折等、著しく日本語ふ異なるより、我等の耳ふは恰も外國語の如く聞あるまど、其の語彙、語形、語法等の類似は明るふ日本語と同一系統なるを示せり。加之記紀、萬葉などの書ふも見ゆる我ふ古代語の反つて此の島の俗語ふ遺るもの多し。例へば夜明をアカントキ、蜻蛉をアケツ、去年をコゾ、妻をトジ、地震をナキといふが如

禁厭

傳説

きは是なり。日本語と琉球語とは同一の母語より出でし姊妹語なりといふべし。

更ふ其の土俗を觀るふ、彼の島のある地方にては近代まで曲玉を身の飾とせしを始め、日本上古の風俗を見るべき一二を遺せり。雷を避くるふ「桑木のま」と唱ふる禁厭もあり、「お月様いくつ」といふに同じき童謠も行へるといへり。殊に我ふ天地開闢の神話ふ似たる琉球創世の神話あり、浦島子の物語ふ似たる與那原の濱物語あり、羽衣の傳説ふ似たる銘苧子あるふ至りては、兩民族の心理上の一致を確むるに如何ふ有力なるぞや。

琉球人の遺せる最古唯一の文學は、オモロといふ歌謠にし

て、おもしろさうしは鎌倉時代より徳川初期頃まで四百年の間、彼の地ふ成りし歌の集なり。其の想、其の調、亦頗る我が萬葉集ふ似たるものあり、世ふ琉球萬葉と呼はるゝも偶然ふあらず。是亦兩民族の思想上の類似を談するものにあらずや。

かく言語、風俗、傳説、文學等の比較上より見る時は、琉球人が日本人と同一なる種族ふ屬すべきこと殆ど疑を容さざるべし。蓋し我が天孫人種ははじめて九州ふ下まり、神武天皇の此の人種を率ゐて大和ふ入り給ひし頃、その一部の南方の海波ふ泛びて沖繩群島に移住したるもの、やがて琉球人の祖先なるべしといふふ一般學者の認むる所なり。唯彼等

（伊波普猷）

の言語、習俗が日本本土ふ對して今日見る如き差異を生じたるは、その分離したる後海島に孤立して、長く本土と交通を絶ちたるによれり。

（琉球人種論による）  
（伊波普猷）

訂補新體國語教本卷七終

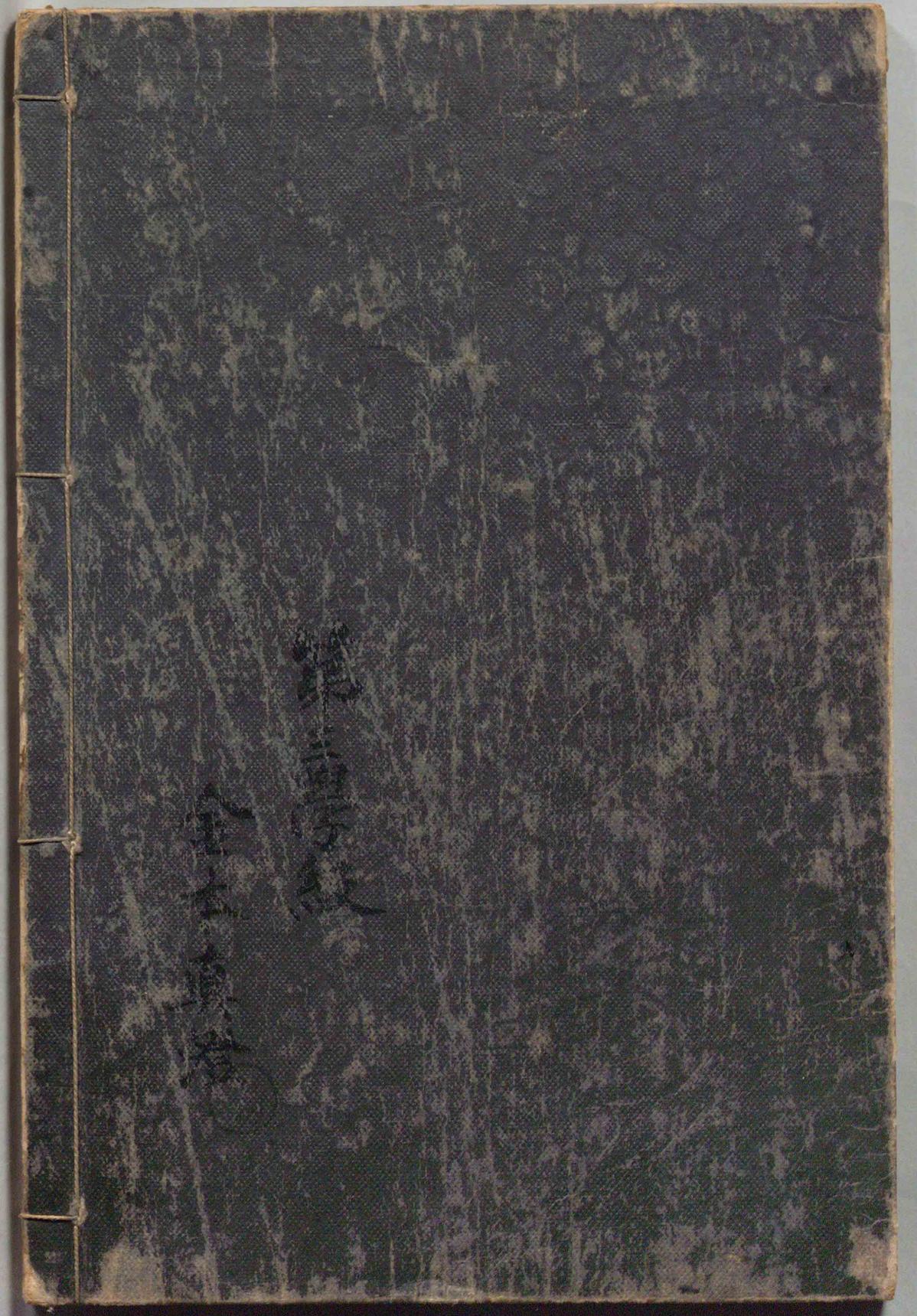
明治四十一年九月廿八日印刷  
 明治四十一年十月二日發行  
 明治四十一年十一月十五日訂正再版發行  
 明治四十四年十二月廿一日修正三版印刷  
 明治四十四年十二月廿四日修正三版發行  
 明治四十五年二月八日訂正四版印刷  
 明治四十五年二月十一日訂正四版發行  
 大正元年八月廿八日修正五版印刷  
 大正元年八月廿五日修正五版發行

訂補新體國語教本  
 每卷定價金貳拾六錢



著者 故藤岡作太郎  
 補訂者 藤井乙男  
 發行者 西野虎吉  
 印刷者 水谷景長  
 發行所 開成館  
 西館販賣所 大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角  
 東館販賣所 東京市日本橋區數寄屋町九番地  
 林平次郎

(刷印所刷印館文博)



皇清  
御製  
通志